

牲 犧

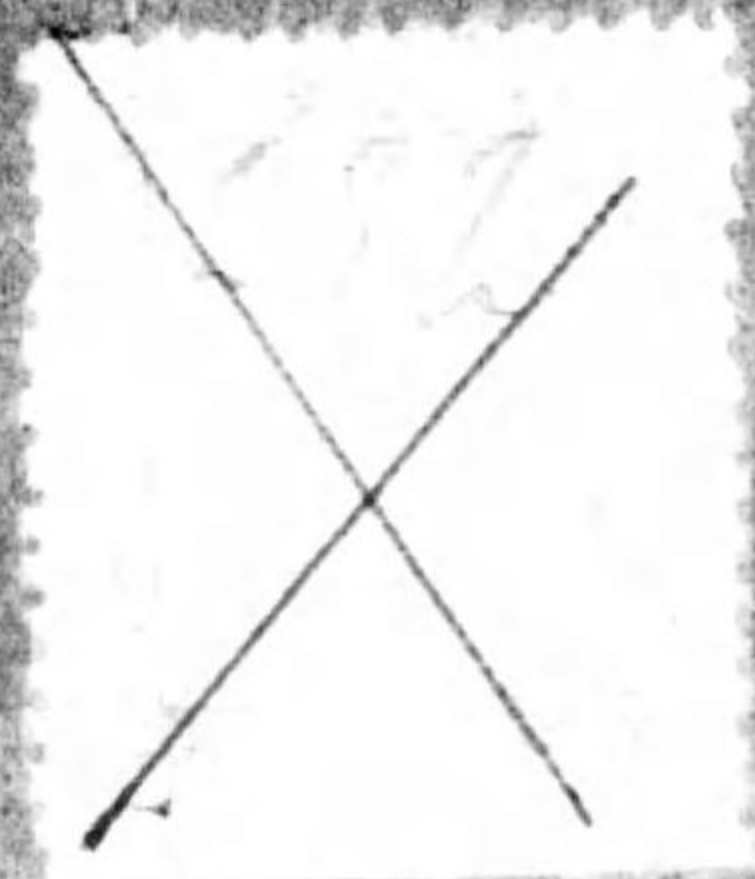


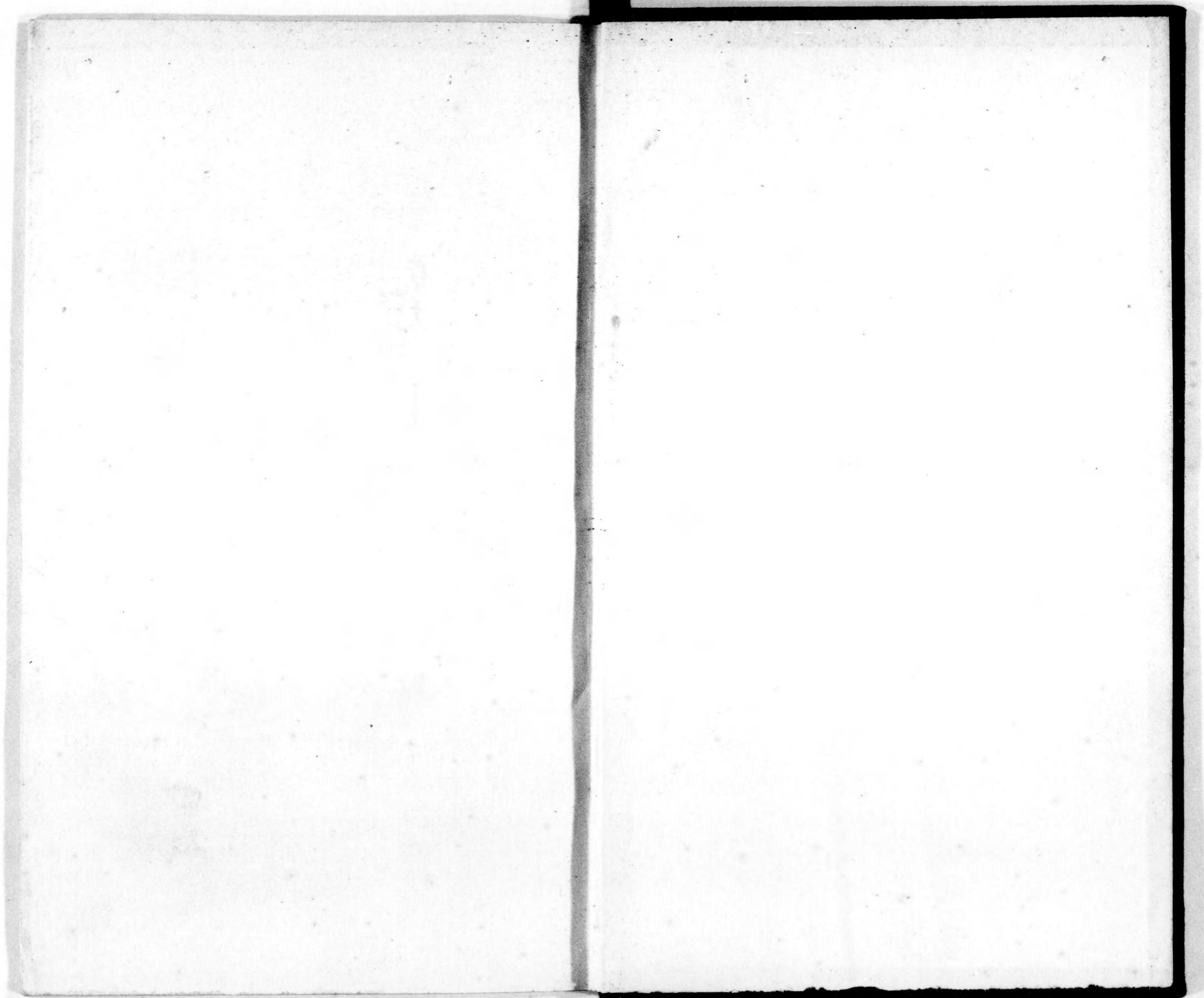
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 ¹⁹/_m 70 1 2 3 4 5

始



牲 犧



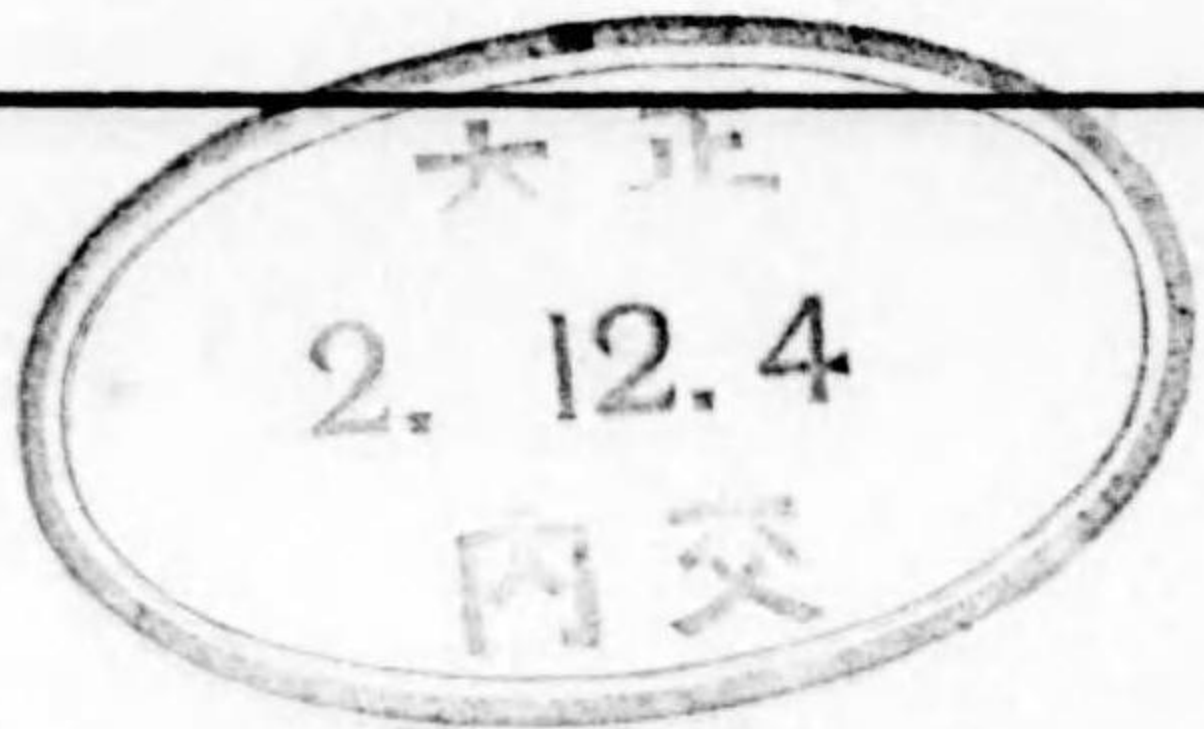


持101

920



佐々木月樵著



犠 牲

自 序

釋尊御修行中の時であつた。

何れよりか、手追の鳩が飛び來つて、釋尊の懷のうちにかけたのである。暫らくすると、一羽の鷹が、あとを逐ふて來た。目をぎよろつかせ乍ら申すやう、どうぞ、鳩を出して下され、私は今餓ゑて居ります、あの鳩を食はざれば死にますからと。

此時、鳩を與ふれば、いふまでもなく鳩の生命を損するのである。さればとて、與へざれば、鷹はまた餓死するのである。その時、釋尊は、自から進んで、我身を鷹の犠牲に供せられました。之が爲めに、鳩は死を免れて喜び

鷹は食を得て悦び、大聖釋尊はまた自己の道を行じ得たことを御歡びになつたときき傳へて居る。

思ふに、われ／＼凡夫は、もとより名聞もほしい、利欲も盛んである。然し乍ら、これらはこれ浮世の衣裳にすぎない。永劫冷えきつて居る我心は、衣裳の如きは、寧ろ邪魔にこそなれ、到底、骨の髓まで温まることは出来ぬ。この故に萬人衷心の叫びは、偽りの假面をとり、不自由なる衣裳をも脱ぎ、まのあたり、面々相見て、すぐすげに身心の温みに觸りたいのである。即ち直言せば、身も心も捧げてくれる人の生命がほしいのである。またその人のみに我が生命が投げ出したいのである。われらが永劫の救済は、唯此犠牲あるのみである。

一日、帝釋天が下界に下つた。そこで、兎と猿と狐とは、下生の天を祝福すべく、各々手を分つて、之が響應の準備を致すこととなつた。因て、狐は

火を猿は薪を採つて來たが、極めて正直もの、兎は、焼肉となすべく、一片の肉をば盗んで來ることが出来なかつた。そこで、兎は自から身を躍らして火中に投じた。帝釋天は、兎の犠牲に感じて、兎のみ生天することとなつた。印度では、月のことを懷兎といふのである。今も尙ほ兎は、月のなかに懷かれて居るのである。

われらの宗教は、正さしく犠牲の宗教である。

大正二年十月十六日

著者識

犧 牲

目次

目次	第一章	犠牲	一
	第二章	乞食	一八
	第三章	ジュリアン	二五
	第四章	覺鐘	四〇
	第五章	ヂレンマ	五一
	第六章	琴	六九
	第七章	苦勞味	七四

第八章	己の姿	八五
第九章	行鏡三昧	九六
第一〇章	破壊	一〇八
第十一章	寶間比丘	一一八
第十二章	存	一二六
第十三章	修養	一三四
第十四章	概念佛	一四五
第十五章	袋町	一七〇
第十六章	二種生活	一七八
第十七章	往生	一九五

犠牲

佐々木月樵著

第一章 犠牲

横濱に大きな酒造家があつた。俄かに大火が起り、どうも風の方が悪くて、段々とその酒造家の方に火が移つて参りました。酒屋の主人は酒倉に火が入つてはならぬと思ひますから、番頭さんや、丁稚さんは勿論、家中のもの總出で多くの倉の窓をしめ、戸を閉ち、その隙間隙間は悉く泥で以て目張をしました。主人は、先づこれで以て一安心である。やれやれ、皆さん御苦勞でしたと、見廻しますと、今まで一所に働いて居た所の丁稚さんが一人居らぬのである。

そんな筈はないと、いろ／＼と探して見たが、どうしても一人足らぬのである。能く考へて見ると、足らぬのも道理である。丁稚が倉の戸をしめに入つて居るのを知らずに、番頭さんが酒倉の戸をしめて目張をしてしまったのである。然かも、それが何れの倉であるか、一寸外からは知ることは出来ぬ。が、何れかの倉に一人の丁稚を込めたことだけは確かであることが分つた。然れば、その丁稚を救ふには、折角閉ぢた倉の戸を悉く開かねばならぬ。どうしやうか、開けば、それから今にも火が移つて全焼となるかも知らぬ。あしやうか、かうしやうかと思ふて居るうちに、火ははやその町内に移つて来た。どんどんと酒倉さして焼えて来るのである。その時、何千石何萬石の酒よりも、一人の生命の尊いことに考へついた所の主人は、すぐ番頭に命じて凡ての酒倉の戸を開かしめた。それが爲めに、一人の丁稚さんは、幸に助かつたが、その口から火がはいつて何千石何萬石を貯藏して居た酒倉は、皆

な悉く酒と共に焼けてしまつたのである。その後、助け救はれた丁稚さんは、生涯、その主人の徳に感じて我身忘れてその主人に仕へたときいたことである。誠に麗はしい話である。げに、人命は酒よりも尊い、主人は、自己の損徳に心をかけず、全然自己を犠牲として丁稚一人を助けたのである。同じく、火事の話であつて、茲に最一つ御紹介したい話がある。

昔、蓮如上人吉崎御駐在御布教の時でした。一夜、吉崎の御坊から火事が出たのである。上人には、とるものもとありあへず、御弟子と共に御避難遊ばされた。火中、急ぎ給ひしこととて、上人は、平生御愛誦の眞筆御本書六軸中、唯『證卷』の一卷を書齋中にお忘れになつた。すぐ、御氣がつきになつた。が、御坊等を御覧すれば、御堂といはず、御書齋といはず、火は一面にふりかかつて、今を盛りと燃えて居る。ああ、残念なことをした。大切の御聖教の一卷を火中にと御歎きの御話終らぬ先きに、御弟子の本光坊は、すぐさま

炎々と燃え立つて居る書齋めがけて飛び込んだのである。上人は、誰かある、氣も狂ふたか、亂心したか、本光坊救へとの仰せを外に、本光坊は、やうやく書齋まで入るは入つたものの、何處にあるのか火煙の爲めに分らぬのである。ここか、かしこかと、手さぐりに尋ねし甲斐のあつて、やうやく、一巻の聖教を手さぐりで見出した。見出したものの、その時は、最早や火は全く四方に廻つて何れよりも出ることは出来ぬ。もう、何とも致し方はない。そこで、本光坊は遂に腹かき斬つて、その御聖教を腹中に藏めた、彼は、終にあはれにも火中に焼死したのである。が、幸に、之が爲めに、聖教は焼け残つたと申傳へて居る。

私は、此二つの話は、餘程面白き對比の話だと思ふ。先きのお話では、丁稚さんの生命、たとへ、丁稚さんでも誰でも生命に上下のあらう道理はない。生命は如何なる場合でも物質よりは尊い。そこで、酒造家の主人は、丁稚

人を救ふ爲めに遂に何千石何萬石といふ酒を犠牲に供したのである。ところが、今此蓮如上人と本光坊との話では、どうであるか。事實は、全くその反對であつた。成程、御聖教は大切な御聖教であつたには違ひない。然し乍ら、御聖教は、物であつて人ではない。若し、物質よりも生命が尊いものならば、本光坊の行爲はつまらぬことをしたとせねばならぬ。ところが、先きに、横濱の酒造家の行爲を麗はしく思ふものは、また此行爲をも麗はしきものとして傳へて居るのである。今その事實からいへば、一方は生命の爲めに物質をすて、一方は一巻の聖教の爲めにその生命をすてたのである。事實は、かくの如く、全然相ひ反對せるにも拘はらず、何人もその行爲を是認して、兩方共に同時に之を麗はしく感ずるのは、その實、何故であらうか。蓋し、兩方共に事實已上に同一精神が動いて居るからであらうと思ふ。それは、何であらうか。申すまでもなく、犠牲的精神の活動である。單に道理理屈で申した

なら、何とでも申されやうが、私は人間の行爲としては、世に犠牲的精神ほど麗はしく、また尊きものはないと存します。そこで、私は此精神を以て平生世間の最上善の一と考へて居ます。今、酒造家の主人の行爲の麗はしきは、必ずしもその丁稚さんが助かつたといふことではない。たとひ、助からなだにもせよ、何千石何萬石といふ酒を、唯丁稚一人の爲めに犠牲に供したといふ所に非常な力がある。本光坊は、聖教をとり出さずに死んだにもせよ、その行爲は、師の爲めに自己を犠牲にしたといふ所に不朽の生命が今も尙ほ滾々と流れて居るのである。たとひ、その行爲や結果やは、多少相違し、或は又相反對して居ても、そこに犠牲的精神が宿り、一切がその活動である以上は、如何なる行爲も、最も尊むべきものであると思ふ。何せなれば、私は、此犠牲的精神を以て、常に道徳的行爲の大生命であり、これがまた眞理ありのままの世相とも感じて居るからである。

然れば、私共は、如何にせば、その大精神に觸れることが出来るか、どうか。私は、今之を觀察すべく、先づ生命及びその持續といふことから考へて見やうと思ふ。先づ此世に何が尊いといふた所が、お互に我生命ほど世に尊いものはない。誰でも、我生命を以て、最も尊いものとして居る。然れば、その尊い生命は、何によつてお互に日々持續し得るか、私は、先づ、第一に此事からして考へねばならぬ。

人間は、日々、何を食べて活て居るか、石や瓦を食べて居ては一日も活て居ることは出来ぬ。お互は、日々、御飯を頂き、野菜を頂く、或は又お肴をも頂けば、時々肉類をも頂くのである。尙ほその他にもいろくさまざまに我生活には、必要なものもあるが、要するに、私共の活て居るには、石や瓦の如き死んで居るものを食べて居ては活て居ることは出来ぬのである。必ず、常に活て居るもの、若くは嘗て活て居りしもの、或はそれから製せられたも

のを頂かぬ時は、私共は、我生命を保持して行くことは出来ないものである。つまり、生命といふものは、常に生命によつて初めて保たれつゝあるのである。

先年、加藤弘之さんが、雲照律師に對して質問せられたことがある。そのうちに、不殺生戒に就ての質問があつたやうに覺えて居る。あなたは平生五戒を保つとか、或はまた十戒を守つて居るといはるゝが、果してどうであらうか。恐らくは精密にいへば、不殺生戒一つも如何であらうといふて、あの方のことです。随分皮肉な質問を出して居られたことである。成程、お互に活て居る以上は、何と辯護した所か、動物性か、植物性か、その何れにもせよ。有機物即ち活て居るもの、所謂生命のあるもの、若しくはそれより製出せられてあるものを頂かすには、一日も活て居られぬのである。この意味からいへば、生活といふことゝ不殺生といふことゝは、どうしたとて兩立

せぬのである。

東京市外の王子には、今日尚ほ木食上人とて、御飯を頂かずに、麥粉と木草とを食として居る人が居らるゝ。たとひ、肉をたべず、肴を頂かざるにもせよ。麥粉ももとこれ生命ありしもの、木草はもとより、生命あるものなれば、木食をする上人とて、またこれ他の生命をとつて、我生命を持續して居るといふことが出来る。仙人は、霞を食べて活て居るといふ昔話は、いざ知らず。今日死や石を頂いて活て居ることの發明せられぬ間は、人間のみならず、すべて世界の生とし生けるものは、常に生あるものによつて、その生命を持續するの外はない。これが、此世の常相であり、また、ありのまゝの實相である。果して然らば、嚴密なる意味でいへば、世界の如何なるものも、生て居るといふことのある已上は、必ず不殺生戒を犯して居るといふこととなるのである。不殺生戒を犯してはならぬとせば、何も食はずに居て、誰で

も自から死するより外はない。自から死するのは、即ちこれ自殺である。自分が自分の生命を殺すなら、これまた最も恐るべき不殺生戒を犯すこととなる。果して然らば、活て居ても、また死んでしまつても、お互に生あるものは、殺生罪を免るゝことは出来ぬのである。すると、人間は凡て獵師である。他の生命あるものを殺して活て居るのである。若し、「獵すなどりをもせよ」の宗教でなかつたならば、我等は一日も活て居られぬのである。要するに、お互に殺生して居る間が、我生命のある間であつて、これがそのまゝ、世界の實相である。

わが師、清澤先生も、一時、肴を食へられなかつたことがあつた。その時、何せでありますかと申したら、どうも、肴の死骸をしやぶることは堪えられぬではないかと申されたのである。成程、お肴を食へるといふことも、肴の死骸をしやぶると思へば、何だか變な氣持ちがする。然し、師匠は、その時、

常に麥粉を嘗めて居られた。若し精密に考へて見れば、麥粉はまたこれ麥の死骸である。これまた、もともと生命のあるものなれば、肴の死骸は食へずに居ることは出来ても、麥の死骸は食へずに居ることは出来ぬのである。その後、苦行の出来ぬことに氣附かれ、また自力で以ては何事も行けぬことが分つて、また肴も食へらるゝやうになられたのである。私も、もとは、さういふ生活がして見たくてならなんだ一人である。何れにもせよ、物質が新たに造ることが出来ぬ如く、生命そのものもまた、新たに造り出すことは出来ぬ。否な、ある所の生命そのものも、時々尅々、他の生命あるものゝ生命をとり來つて之を補充せぬ時は、一日片時も持續することは出来ぬのである。つまり、お互に、一日我生命を保つには、それだけ、他の生命を破壊し來つて之を補はねばならぬ。これは、必ずしも人類のみでなく、如何なるものも、生命あるものは、必ずさうでなければならぬのである。つまり、我大切な者

のうちその最も大切な我生命は、到底自から造ることは出来ぬのである。何れも何れも、皆なこれ他力の附與に預つて居るのである。換言せば、人命は、何れも皆な他のものが犠牲となつて、私に與へて居るものである。即ち他の生命あるもの、我爲めの犠牲である。然り、犠牲である。要するに、世界の存在は、此犠牲的精神の發現に外ならぬのである。少くとも、私人の存在は、多くのもの、犠牲にそだてられ、犠牲の賜物である。

神に犠牲を捧げるといふことは、古來から宗教的儀式のうちにも最も多く行はれて居る儀式の一つである。此儀式は、印度にあつても、また希臘にあつても多く行はれて居るのである。我國にても、『日本書紀』皇極天皇元年六月、牛馬を殺し、神に供へて降雨を祈りしことが見へて居る。さて、また『宇治拾遺』のうちには、「とし毎の祭に必ず生贄を奉る、人の娘のかたちよく、髪長く、みなりおかしげに、姿らうたげなるをぞ選びもとめて」と記してあ

れば、人身供養も早くから行はれて居たことが察せらるゝのである。今も、なほ野蠻人のうちには、かゝる犠牲が行はるゝともさゝ傳へて居る。否な、文明の今日、至る處にまだ精神的にはかゝることは、どしどしと行はれて居る。多くの宗教は、神に犠牲を捧ぐるの宗教である。ところが、我絶待他力教のみは、我等が如來の犠牲となるのではなく、反て、如來、我が爲めに犠牲になつて下される所の宗教である。これ實に、本願の宗教である。如來の本願とは、實にその本源を此犠牲的精神に有して居るのである。その犠牲、その御苦勞によつて、われゝは助けらるゝのである。その犠牲、その御苦勞によつて、われゝは無量壽、無量光の佛となり得るのである。三千世界、何れの地を見ても、法藏菩薩、捨身の地でない所はないのである。これは、單に佛説、或は昔の本生譚、又は神話等ではない。確かな現實の事實である。現に、今此世界の當相そのものゝ上に之を認むることが出来るでは

ありませぬか。能く／＼我生命の本源をさぐり、現實の世相をありのまゝに見る時は、四維上下、何れを見ても、吾人はその大精神の活躍しつゝあることを認めずには居られぬのである。國家といはず、社會といはず、或はまた家庭といはず、常に大生命は大なる犠牲的精神の附與する所である。私共は、その生命によつて活ることが出来る。つまり、私共は、國家乃至家庭等の恩恵のうちに活て居るものである。果して然らば、私共は、一日片時もこれを忘れてはなりません。佛教にては、此意義よりして種々の恩恵が説かれて居るのである。因て、眞面目に自己を觀じ。また世相を感じたならば、何人も世界の存在は勿論、我存在も亦全く此恩恵即ち犠牲的精神の發現であることに氣附くであらう。今之を一口に申さば、唯恩の一字である。私共は、恩恵のうちに生れ、そのなかにそだてられ、そのなかに住み、そのなかに病み、そのなかに死んで行くのである。あゝ、難有いことである。げに、宗教とい

はず、道德といはず、一切すべてのものは、此精神によつて初めて生命を有し。そこに麗はしき結果を生ずることと思ふ。

先年、神田の須田町街頭に廣瀬中佐の銅像が立てられた時、私は一夜、さる會合の序に、南條師と共に之を見に參つたことである。丁度、その夜は曇つて居た。斷雲の間から、あちら、こちらに少しづつ星がその光を見せて居た。當時、銅像の主たる中佐が旅順閉塞を行ふた夜は、やはり、こんな夜であつたであらうと思ひ浮べつゝ、その銅像の下に起つたのである。ヌツト高く立ちて居らるゝ中佐の勇しい姿を見ては、私は先づ當時のことが思はれたその時、私はその中佐の足元に、また一つの銅像があつて、手にハンマーを持ち、勇ましく控へて居るのを見て、そこにいひ得られぬ力を感じたことである。足許にある銅像とは、申すまでもなく、杉野兵曹長である。申すまでもなく、廣瀬中佐は、明治三十七年三月二十七日の夜、豫定の如く旅順口第

二回目の閉塞の任務を了つて、一先づ端艇に移られた。もう、これでよいと、愈々根據地に歸らばやと艇中の人員を調べて見ると、唯一人杉野兵曹長が居らぬ。そこで、中佐は、杉野一人の爲めに、今や沈みかけて居る船に移つて、船底隈なく杉野を探されたのである。「オーイ、杉野はどうした」と。何の答へもない。致し方はないから、端艇にかへられた。が、然し、どうしても、杉野一人をすてて歸ることは出来なかつたのである。因て再び船に立ち戻つて之を尋ねたのであるが杉野は居らぬ。「杉野」、「杉野」と、三たびまで沈みかけて居るその船に立ち戻つて杉野を尋ね探されたが、杉野は、遂に出てこなんだ。三たび目に、中佐は敵の彈丸にあたつて唯一片の肉片を端艇に残して果敢なき最後を遂げられたときいて居る。私は常に思ふのである。杉野は、中佐の呼聲をきいたならば、何ときいたであらうか。たとひ、既に死んで居たにもせよ。彼はその呼び聲にその精神は復活し、草葉の蔭で、さぞかし、

喜んで居たであらうと思ふ。今日、尙ほ銅像の下に起つてその二人の姿を仰ぎ見ると、私は、そこに上下相應じて永へに滅せざる無限の響をきくと共に、また兩個の銅像の上にも大なる犠牲的精神の活躍して居るのを認むるのである。われらは、常にその呼聲をきかねばならぬ。その呼聲に目覺め、その大なる犠牲的精神に攝取せらるるの時、そこに初めて不死の靈泉に浴することが出来るのである。

絶對他力教の信仰は、我が親の五劫の思惟と永劫の修行との犠牲的大精神にその根底を有して居るのである。我親の十劫このかた我一人を尋ね救はんと呼びかけ給ふその御聲にきくのである。杉野の如く、命をすててその大精神に應へぬ先きに、命をすてて御助け下さるる親の恩恵に活るのであります。

第二章 乞食

十餘年前の事でした。

帝國大學の宮御殿で、佛敎攻究會の開かれたその歸りであつたと思ふ。本郷は森川町の狭い町でした。私は、そこに、ふら／＼と杖をたよりに一人の老乞食の、物乞ひ行くのを見たのである。界限での噂によると、此老乞食に就ては、かういふ話が傳つて居る。

生國はといふと、何でも遠い遠い片田舎である。もとより、始めからの乞食ではない。もとは、相當な日暮をして居た百姓であつたのであるが、妻が産後の病とかで一人の女兒を遺して死んだのが、そも／＼彼が不幸の始まりであつたのである。心を遺して死んだ佛の事を思ひ、また兒が可愛想だから

といふので、彼は後妻を迎へずに男の獨り手で以てその子をそだてたのである。

娘は、年頃となつた。親はよき婿をも迎へばやと思ふて居るその時、如何なる魔に魅せられたのであるか。娘は大恩ある一人の親を見捨てて家出をしたのである。どうしても、その後、行衛が知れぬので、子を思ふ親の悲歎は一方でなかつた。寄る年波にいよく娘戀しく、遂にまた親もふら／＼と我家を出たのである。もとより、たよりなければ、これといふあてどもない。風のたよりに、東京に居るとかきいたので、兩三年前に尋ね／＼て東京にまで来たこのことである。貯への金子は、何時しかなくなつた。氣も今では變になつた。何人かが書き與へてやつたのであるか、首にかけたる尺餘の札には、娘の人相が書いてある。私は、初めて森川町の狭い町で此老乞食にあふた時、何となく、ものの哀れを感じると共に、娘の無情を思はず居られな

かつたことである。

それより二三年たつての秋の夕方であつた、私はまた再び、その老乞食を上野不忍池畔の、とある町に於て見たのである。いたはしや、その折は双眼ともに殆んどつぶれてゐた。蓋し、泣きつぶしたのであらう。何時習ひ覺へたのであるか、例の札を首にかけ、人の軒端に起つて、尺八を吹いて居たのである。ああ、これ、誰を尋ねやうとて、誰に聴かさうとの親心であるか。私は、その姿を見、その音をきいた時、計らずも未だ嘗て味はなかつた宗教の犠牲的信味にいたく動かされたことである。

佛を信ずるとか、或はまた頼むとかいふことは、人々容易く之を口に致して居ますものゝ、その心持ち如何は、なかく明確と納得し悪いものである。従うて、その心持を示す所の言葉も、なかく見あたらぬのである。私は、

此老乞食を見、その吹き出す音をきいた時に、何だか、我知らず永劫私の尋ねて居たそのものに、その時計らずも尋ね出されたやうな感じをしたことである。

平生、私の胸に強く響きつつある所の思ひは、私は永く知らずに居たのである。それが何時とはなしに尋ね出された。何時とはなしに呼び起されて、私の今は正さしく待てる身といふ感じに活て居ることである。自分の方から、道を求めたとか、信心を得たとかいふひ方では、しつくりと胸の思ひがあらはされぬやうな氣がする。私では、今まで、それほど知らずに居た、何も知らずに居たのに、ふりかへつて見れば、親が十劫この方私をさがして居て下されたのである。その行く先きをながむれば、十劫この方待ちて居て下されたその思ひに、此胸が一杯になつてしまふのである。『法華經』の長者窮兒の譬喩も尊く、阿波の鳴門のお鶴もまた難有い、石童丸は親を尋

ねて高野の山に登つたといひ、近くは、愚庵上人も二十五年間母を尋ねて、遂に佛門に入られたときいて居る。私は、もとは、これらの話を大變に難有く思ふたものでした。が、今となつては、これらの話では、ものだらぬ身である。我親は、尋ねて遇ふた親でなく、求めて得られた信念ではなかつたのである。私共は、求むる人、尋ねる人ではなかつた。私はさがさるる人であつた、求めらるる人であつたのでした。私共は、智慧の眼がつぶれて居る、眼で遇ふ親ではなくて、名號の呼び聲のうちに親子相遇ふ身の上であつたことを喜ぶのであります。私は、全く、さがす人、尋ねる人でなく、親にさがされ、親に呼び起される人でした。私は、娑婆執着の多い人間です。淨土參りを悦んで俟つて居れと仰せられたら、到底その教では救はるものでなかつたのである。よくよく御慈悲の御手許を伺ふて見ると、待つ身は我身でなく、私共は我親に俟るる身であつたことを喜ぶとである。

親鸞聖人は、建仁第一の曆、源空上人吉水の禪房に親を尋ねになつたのである。その時、「立所に他力攝生の旨趣を受得し、飽まで凡夫直入の眞心を決定ましましけり」と、安心安堵なされたのは、待ち給ふ法然上人、否なそれを通じて永劫の親に御遇ひすることが出来たからである。「至心信樂、己を忘れて速かに無行不成の願海に歸し、憶念稱名勇みありて鎮へに不斷無邊の光益にあづかることの出来たのは、十劫この方我を尋ね、我を待ち居て下された親にあふことが出来たからである。「親鸞におきては、たい念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なき也」との御語の上にも、當時の御心持ちがありありと偲ばるる。我聖人には御師匠法然上人に御遇ひ遊ばされた時が、そのまゝ、我親に御遇ひ遊ばされた時である。御師匠の「南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本」の念佛は、永劫我親が我を尋ね、我を呼び給ふ親の呼び聲である、私共は、煩惱に眼さへられし悲

しさには、直ちに親の姿を見ることは出来ぬ。が、幸にも、親の聲はきくことが出来る。他力教は見佛の教でなく、聞其名號の教である。われらは、南無阿彌陀佛の聲のうちに親子相遇ふのである。

老乞食の尺八の音は、之を上野の音楽堂にて名人の吹き出すそれと比較したならば、拙は必ず拙でもあらう。然し、拙にもせよ、その音は、一時間何如程で雇ふて来た樂人のそれとは少々趣が違ふ。その聲のうちには、十數年來、我子戀しや、我娘可愛やの親のまことが含まれて居る。南無阿彌陀佛の六字は、さのみ功能のあるべきとも覺へぬであらう。が、此なかには、子となつて初めて味ひ得る無上甚深の功德が含まれて居る。

「水を渡りまた水を渡る、花を看また花を看る。春風江上の路、思はず君が家に到る」。われらの生活は、聲に導かれ、親に待たるる生活である。

第三章 ジュリアン

近時、讀みましたものうちで、同じく私にいたく犠牲的信味を與へたものは、フラウベル氏の『聖ジュリアン』の後半である。これまた同じく乞食の話である。

話の大意は、かうである。

ジュリアンの父母は、深い森の木間隠れに、山の半腹に立ててある城に住んで居た。

ジュリアンが生れて、三日四晩、城内では引ついで、お祝ひの大宴會が催された。これが爲めに、澤山の鶏や羊が、殺されたことである。産後の夫人は、宴會の席には出なかつた。床のうちになつとして、月のさしてゐる窓

を見ると、何か物の影が動く。よく見ると、粗服をつけた手に珠數を懸け、肩には乞食袋を擔つて居る一人の翁であつた。丁度、世捨人のやうな姿であつた。夫人の枕元に近附いていふやう、「母なる人よ、お喜びなされ、そなたの御子息は聖者になられますぞ」と。翌朝、ジュリアンの父親は、客を城外に送つて出ると、また忽然、霧の中に一人の老乞食を見たのである。その乞食は、さも興奮したやうな調子で、きれ〜にかういふたのである。「ああ、ああ、御子息は、血をお流しになることも多い、譽をお揚げになることも多い。何日も福は身に副ふて居る。帝王の族ぢや」と。その時、主人の投げてやつた錢を拾はうとして、その乞食は身を屈めながら草の中に隠れてしまつた。夫婦は共に、眞實か氣の迷かは知らざれど、そのきいた我子の上の豫言に就ては互にその秘密を隠し合つて居た。併し生れた子を可愛がることは、同じであつた。夫婦ともに神佛の印をうけてゐる子であると思ふので、力一

杯に大事にしたのである。

長ずるに従ふて、ジュリアンは學問、技藝を教はつた。大變に父親やその友達の人々より軍物語をきくのを喜んだ。これと共に、また御寺に參詣することをも樂んだ。一日、父母と共に御寺に參詣して居ると、一匹の鼠が出て來て。何となく、いやに思ふと共に、退治してやらうといふ氣が生じた。遂に之を殺したことである。それから、城の園に遊んで居る小鳥を見ると、そつと歩みよつて、蘆の筒の吹矢で吹くと、小鳥が雨のやうに落ちて來るのである。ジュリアンは、面白くて〜笑を禁じ得なかつたのである。それから、父親よりも狩りのことを教へられて、常に獵犬をつれて、あちらの山、こちらの野に出でて獵をしたことである。

或る冬の朝のことであつた。ジュリアンは、まだ夜の明けないうちに、すつかり支度をして出かけた。段々と、途すがら、獵をしながら、森深くはい

つた。すると、鹿が一疋茂みから飛んで出た。ダマ鹿がまた一疋曲り角から出て来た。穴熊が一疋巢の中から。さうしてまた孔雀が一羽草原の上で羽を擴げて居る。ジュリアンは、みなそれを殺してしまつた。すると、あとから、あとから、如何ほどでも出て来るのである。どれもく優しい、命乞をするやうな目附をしてジュリアンの顔を見るのである。が、ジュリアンは容赦なくこれを片端から殺したのである。

眼前にまん圓い谷がある。谷合には何疋とも知れない鹿がうよくして居た。ジュリアンは、馬から下りて、袖をまくり上げて弩を射はじめた。第一の矢が鳴り響くと共に、鹿はみんな首をこちらへ向けた。それより、矢の飛ぶことは、雨の如くにして、とう／＼鹿共は皆な矢に中つて死んだ。日が暮れた。森のあなたを木の間から見ると、空が血で染つた布のやうであつたのである。ジュリアンは、木の幹に背を寄せて、自分の殺した無数の鹿の死

骸を眺めて居ると、ふいと谷合の向側に、牡鹿が一疋、牝鹿が一疋と、鹿の子が一疋と立つて居る。牝鹿は、毛色が眞黒で體が非常に大きい、角は十六本に分かれて白い鬚を垂れて居る。牝鹿が草を食いながら歩くその間を班の鹿の子が乳房を銜へながら付いて歩いて居るのである。

弩は、また放たれた。鹿の子は直ぐ死んだ。その時、鹿の母は、天を仰いで胸の裂けるやうな聲をして啼いた。ジュリアンは、またその牝鹿の胸を射抜いた。大きい牡鹿は、ジュリアン目がけて飛びかゝつて来た。彼はまた最後の一矢を牡鹿に送つたのである。矢は眉間に中つた。そのまゝに立つて、少しも傷みを感じぬ様子で以て、牡鹿は、火のやうな目を見張り、裁判官が宣告するやうに、ジュリアンに對して、次の語を三度繰返した。その時、遠い所で鐘を撞き始めた。

「咀はれて居れ、咀はれて居れ、咀はれて居れ、飽く事を知らぬ奴、いつか

は、父と母とを手にかけて殺すであらう。」

牡鹿は、いひ終つて徐に膝を折り、目を瞑つて死んだのである。

ジュリアンは、急に恐怖に打たれて、どこを走るともなく、野路を逃げた。すると、不思議にも、我城門の前に歸ることが出来た。ジュリアンは、その夜、どうしても寐られなかつた。吊ランプの光で、絶えず、大きい黒い牡鹿が見ゆる。また、そのいふた語が耳について居る。「嘘だ、嘘だ、二親を殺すやうなことはない」と、我と我心に抵抗して見る。が、ふいと、「それでも、若し殺したくなつたら」とも思ふて見た。悪魔が、若し己をそんな心にはすまいかと心配するのである。それから、半病人のやうであるから、母親は、いろ／＼と心配した。醫者の見立てによると、ジュリアンは戀煩ひではなからうかといふのである。ジュリアンは何を問はれても、唯首を振つて答へなかつた。そのうちに、健康のみは復した。もう、それから、狩に出か

けなかつた。父親は、忤を喜ばせうの思ひより、大きな劔をくれた。その劔を高い所から外さうとすると、思ひの外重かつたので、指から滑り落ちた。計らずも、父親をかすつて父の上着が縦に切れたのである。その時、ジュリアンは、父を殺したと思ひて一時、氣を失ふた。

また、ある晩のことである。ジュリアンは、園の木立の間に立つて居る。その時、ふいと、柵上に白い羽が二つ動いて居る。鵓鶴に違いないと思ふて投槍を投げた。胸の裂けるやうな叫聲がして。近いて見たれば、母親である。母親が、長い帽子の翼を投槍で石垣に釘附けになつて居た。

ジュリアンは、遂に城を逃げ出した。それからは、冒険家の群に入り、元來、力が強く、大膽で、用心が深かつたので、容易く一群の首領となつたのである。その後、オクシタニア帝王を救ふたのが縁となつて、遂にその女と結婚して王位に登つたことである。彼は、それより平和の民に戴かれて平和

の日を送つた。時々、また狩りがして見たいと思ふた。隣邦の諸侯から獵の案内をうけたが、ジュリアンは何故か、之を斷つたのである。どうも、自分の兩親の運命は、自分が鳥獸を殺すと殺さないに關係して居るやうに思ふたからである。併し、心には、久しく別れて居る兩親に逢はないのを悲むと共に、獵の出來ないのをじれつたく思ふたことである。妃は、遂に夫の心を知つて、そんなことはない、狩に行きたければ行くべきであると申ししたことである。

或る年の八月某日の夕暮であつた。ジュリアンは、祈禱をして居ると、窓下に狐の啼聲がして、その足音らしい物音さへ聞えた。その誘惑にひかれて、彼は籠を手にして日の出るまでには歸るといふて城を出たのである。間もなく、二人の旅人が城にジュリアンを尋ねて來た。城主が留守ならば、妃様にお目にかゝりたひといふので、誰かと逢ふて御覽になると、ジュリアンの兩

親であつた。腰は曲つて、二人ともに見る影もない姿をして居る。そのいふのをきくと、忤が城を出てからは、もう歸らないものと知つて自分達も城を出た。長い年月の間、あちらこちらさまよつた。方々で子のことを尋ね、少しでも手掛りらしい事があると、それに便つてさまよい歩いた。最初は金を持つて城を出たのであるが、だん／＼と旅金もなくなつた。とうとう、今は乞食となり下がつたのである。然し、今茲に我子の居所を尋ね當てたのである。今日までの難義は忘れしました。我子は、こんな美しい妻を娶つたのかと、じつと妃の顔をながめて悦ぶのである。そこで、妃は、そのうちに夫も歸るであらう。先づ休んで、待つて居て下さいと、いつも自分の寝る床の上に、手づから老夫婦の臥所をしつらつてやつた。

是より先き、ジュリアンは、城を出で、森深くはいつたのである。すると、初めに野猪を見、次に一疋の狼が目に留まつた。先づ一矢を送つた。狼は首

を振り向けて敵を見て又駈足を續けるのである。それに引かされて、平野を過ぎ、高原に出た。いろ／＼な鳥獸等に出あふた。矢を送り、或は刀を抜いて、それらのものを打殺さうとすると、どうしても殺すことが出来ぬ。木立奥深い所に入ると、木々に光物が數限りなく見ゆる。天の星がみな此森に落ちて光つて居るやうである。能く見ると、それは、皆な禽獸の目である。ぞつとするのである。ジュリアンが駈け出すと、四方よりいろ／＼な蛇や狼や蝟や豹やが顯はれて同じやうに駈け出すのである。蛇はじゆつと聲を立てながら、野猪は踵をこすりながら、狼は口髯でジュリアンの手の平をくすぐり乍ら。ジュリアンは、毒虫惡獸に圍まれて、「助けてくれ」の聲さへ出ぬのである。その時、忽ち鶏の一聲が空中に響き渡つた。間もなく、自分を宮殿近き所に見出したことである。ジュリアンは、宮殿の石階を登つて、多分甘寢をして待つて居る妃を喜ばさんと、そつと妃の室に這入つた、寢臺の縁に

身を寄せて妃に抱き附かうと思つて枕の方へ身を傾けると頭が二つ並んで居る。さてはと驚いた。妃と一處に寢て居るのは、確かに男である。ジュリアンは、さては、姦夫姦婦と、一躍して短刀にて幾刺も幾刺も刺したことである。その物音に、妃は手燭をとつて飛んで出て來た。ジュリアンは、その光にて、我父と母とが、そこに我手にて無殘の最後を遂げて居るのを見たのである。

その日の暮方、ジュリアンは、妃に對して、どうぞ葬式はかく／＼してくれ、さうして一切の財産等は之を御身に捧ぐといふて、城を出てしまつた。二人の葬儀は、極めて盛大に行はれたことである。その行列のずつと尻に、外の送葬者と一人離れて、被物を顔に垂れた一人の僧が歩いて行くのである。葬儀がすむと、その僧は、度々背後を振り返つて見ながら山の方へと見えなくなつた。それより、ジュリアンは、自から乞食となつた。それからといふ

ものは、自分が自分で厭になつた。どうかして、自分を無くしやうとして、わざと危険な事に身を委ねたのである。火事の時に、火の中から體の利かない人を助け出したり。深い谷に落ちた子供を救ひに降りたりなどした。どんな深い谷底でもジュリアンを吐き出してしまふのである。どんな焔でもジュリアンの身をば焼かずに苦しめるのである。時は経つても、その苦しみは増すばかりである。一度は死なうと思ふた。すると、白髪の老人が泉をへだてて真向ひに立つて居る。その哀れなる姿に泣くと、老人もまた一所に泣いた。ジュリアンは、一度見たやうな顔だと思はれてならない。その筈である、その老人は亡き父であつたのである。もうそれからは、ジュリアンは死なうとは思はなかつたとのことである。

ジュリアンは、國々をさまよつた、さうしてある川の岸に出た。極めて急流であつた。人が渡らなくなつてから久しいものである。岸に一艘の古い舟

が舳を上に向けて出して居る。その舳は泥に漬かつて居る。さうして、舟の中に舳の残つてあるのを見た所のジュリアンは、今後は此川の渡守となつて、餘生を送らうと決心したのである。木を集めて古い舟を修覆し、粘土と伐つて来た木とで小屋を拵へて、日夜旅人を渡して居た。春になると、濡つた土地から腐敗の蒸氣が立ち、夏になると蚊が雲霞の如く集まつて来る。冬になると、その寒さは、何もかも石になるかと思はる程である。

或夜、ジュリアンが眠つて居ると、誰かが自分を呼び覺すやうであつた。耳をすまして聞いて見ると、唯波の吠える聲許である。暫くすると、また誰かが「ジュリアン」と呼ぶのである。どうも、向うの川岸らしい。提燈をつけて小屋を出たのである。大暴風の夜中であつたが、纜を解いて向うの川岸に着くと、そこに一人の男が待つて居たのである。

身には、ちぎれかかつた麻の着物をつけて居る。顔は石膏の假面のやうで、

兩眼が吹き起した炭火よりも赤い。恐ろしい相好の壊れかけた癩病患者であつた。やうやく、川を渡して小屋に入ると、一見胸の悪くなるやうな旅人は、「自分は腹が減つた」といふた。そこで、ジュリアンは、自分の食ふ麩麩を與へた。尙ほ「喉が乾く」といふ。自分の唯一つしかない土器に水を入れて與へた。只一息に飲み乾して「寒い」といふのである。火をたいて與へたが尙ほ寒いといふのである。見れば、總體が顫へて、瘡からは膿が流れて、目の光澤は段々と無くなる。絶え絶えになつた聲で「お前の寢床へ寢かしてくれ」とつぶやいた。ジュリアンは、徐かに手をとつて、自分の床へ連れて參つた。そこに寢させて、船の帆を上から着せてやつた。癩病やみは、うめき乍ら、骨々の中に氷が這入つて居るやうだ。己の傍へ寢て温めてくれといふた。ジュリアンは、帆木綿をまくつて、例の木葉を掻き集めた床の上に、病人と體がびつたりつくやうにして横になつた。癩病やみは、顔をジュリアンの方へ

振り向けた、「裸になつてもつと確り温めてくれ」といふた。ジュリアンは着物を脱いだ。眞裸になつて又床に這つた。體を病人にびつたりつけると、その肌は蛇の皮よりも冷たく、鮫よりもざら附いてゐる。病人は、うめきながらいふやう、「ああ、己はもう死ぬる。もつと傍へ寄つて温めてくれ、體中で温めてくれ」と。ジュリアンは、兩臂を擴げて丁度蓋になるやうに、病人の上へ俯伏した。口と口と合ひ、胸と胸と合ふたのである。その時、癩病やみは、兩手でしつかりと抱き附いた。不思議なるかな。その時、能く見ると、ジュリアンは親に抱かれて、天に登りつゝあつたといふことである。

これが、ジュリアン物語の大要である。思ふに、犠牲は慈悲の究極である。人々に生命を與へ、満足を與へ、温みを與へるものは、唯此犠牲ではなからうか。

第四章 覺 鐘

西洋醫者の話をきくと、あちらで人間が一生涯一人で頂く所の牛肉類は、これをつもつて見ると、大牛何頭、豚何頭とかになつて居るとのことである。嘗て、私は、これらに關する精密なる統計表を見て驚いたことがあつた。それからして、お互日本人はと、自から考へて見たことがあつた。日本人は、肉類を食ふことは、之を外國人に比したなら少ないことでありました。魚類になると、澤山頂くのである。一人一生涯は愚乎、一年中でも決して一人分一網や二網では到底すまないことであらうと思ふ。

学校の寄宿舎などでは、能くチリメンジャコと申す小さな魚を皿に盛つて賄はたべさせるのである。此頃はどうか、知りませぬが、私の中學に居り

ました頃などは、時々なので閉口しましたから今でも能く覺へて居ります。一度、何げなく、山々と皿に盛つてあるその數をかぞへ乍ら食べて見た。今では忘れましたが、四百何十匹かあつたのであります。大きな牛一頭も、小さなチリメンジャコ一匹も、生命そのものよりいへば、同じきものである。一生涯に何頭位でなく、一時に何百匹が我爲めに供せられたかと思ふと、我ながら驚かざるを得ない。正月元旦の重箱を開けば、貧乏の家にも、先づ何はなくとも、タツクリとカズノコだけは盛つてある。御歳暮のサケが一匹か二匹ですむ家でも、正月のタツクリとかカズノコのみは、二匹や三匹ではすまずことは出来ぬ。事實か、どうかは知らぬが、一休禪師は元日に獨體を持つて「芽出度もあり、芽出度もなし、御用心御用心」というて回禮せられたときき傳へて居る。ところが、能く考へる時は、我等は都合によるとこれ已上の

奇矯を演じて居るかも分らぬ。私共は、正月元日から、タツクリや、カズノコの無量の死骸を重箱につめて、芽出度一家うちよつて屠蘇の杯をあぐるのである。然れば私共は、一休さんの無常の教已外に、更にこれらの事實によつて、ありくと人間は他の生命によつて活き、また犠牲の恩恵に養はれて居るといふことを年中忘れてはならぬ顯示と考へたい。

昔から、元日に屠蘇を頂けば、一家一年中の邪氣を避けまた齡を延ばすといひ傳へて居る。私は、山椒、防風、肉桂、白朮等で調合したそのものには、果してその効能があるかどうかは知りませぬが、少くとも。その名の上には、そのまゝ、生命(蘇)の本源は犠牲(屠)の恩恵であることも暗示して居ることと思ふ。若し、元日早々から各自一家のものが我儘勝手であつたならば、一年間能くその家の治まる筈はない。互に犠牲の精神をば忘れずに一家和合して行くことが出来たならば、確かに一年中の邪氣を避けることが出来ると思

ふ。國家の生命は、常に國民の犠牲的精神によつて初めて活躍し、その精神はまたそのまゝ、一家の上にも平和の光を與へ、また自己そのもの、上にも眞實の存在の意義を明かにするものであるからである。

孟子が齊の宣王の所に參つた。

その時、王は孟子に對して何か齊桓、晉文のことを談してくれと申された。すると、孟子は、仲尼の徒は、桓文のことは談じませぬ。若し、何か是非に談せとならば、王道に就てでもといふた。そこで、王は、徳如何なれば則ち王たることが出来るかと問はれたのである。答は、極めて簡單であつた。「唯民を保んずるに在ります」と。この保んずるといふのは、趙氏の註には、「安んずるは則ち恵、黎民懷之、若し此以王」というてある。要するに、あはれみ恵むの心であらう。宣王は、それをきいて、すぐ、「寡人の如き者、以て民を保んずべきか」と、その教を自分にひきうけて孟子に問はれたのは、眞實く道を

求むるもの、好手本である。また、それに對する孟子の答も能く教ゆる者の手本を示して居る。曰可なり。それは、出來ますとも、何によつて、その可なるを知るかと申せば、私は、嘗て王の近臣胡斡君から、斯様な話をききましたが、全體その話は事實でありますかと語り出した話と申すのは、かうなのである。

一日、王には、堂上にあらせられた。すると、牛を牽て堂下を過ぐる者があつた。王見て申さるゝには、あの牛はどうするのであるか。あれで御座りまするか、あれは、「將ニ以釁鐘」が爲めであります。これは、どういふことかと申せば、古は宮室など成れば、必ず之に釁つて之を落するの禮があつたのであります。今度、丁度新たに鐘が鑄造せられた、そこであの牛を殺して、之に牲血を塗つて祭るのであるといふのであつた。それならば、舍よ、罪なくて穀棘として死地に就くのを見るに忍びぬからと。然らば、鐘に釁ること

を廢しましやうか。それは、廢することは出來ぬ。羊を以て、あの牛にかへたらよからう。

かういふ話をききました。果して事實でありますか。王の申さるゝには、それは事實で、見たら、どうも、牛が可愛さうで忍びがたかつた。その忍びがたかつたといふ語をうけて、一刀兩斷に、孟子は、その心以て王たるべしと、正さしく大道の談の口を開かれたのである。——先づ、王のなされかたを観るに、見様によつてはいろいろに見ることが出来る。牛は大である。羊はこれに比すれば小である。この故に、王は財を惜みて大なる牛に代ふるに小なる羊を以てしたのではなからうかと見ることも出来る。成程、齊國偏小なりと雖ども、吾何ぞ一牛を惜まんや。唯罪なくて、死に就くのが忍ばれなかつたからとの王の辯解は一往理があるも、再考するとおかしい。何せなれば、牛も羊も同じ生命あるものではないか。王には、牛に對して罪

なくして死地に就くのを隠まば、羊にのみ何の罪があるか。また羊に對しても、さうでなければならぬのではないか。然らば、王のなされたその事を百姓が見て以て財が惜いからだとして評したとて何と辯解のしやうもないでしやうと難じた。そこで、王も、また成程、さういはれては已むを得ないと笑ひながら、また眞面目になつて、どうも私は財を惜むのではなく、唯忍びがたかつた故といはれたのである。孟子は、正さしく王の心を付度した。「君子之於禽獸也。見其生不忍見其死。聞其聲不忍食其肉。是以君子遠庖厨也。」道德の問題は、理屈でも、推理でもない。従うて、今此問題は概念上の問題でない。牛を以て羊にかへよといふたのは、まのあたり見て居る所の事實である。實際、牛の生を見ては、その死を見るに忍ひなかつたといふより外はないのである。王は、他人、心あり、予之を付度すとは夫子之謂也とて之を説かれた。茲に孟子は、除るに王の心を啓發したれば、正さしく「不能」と「不爲」ととの別を示し、大に宣王に對して大道の何たることを説き示したのである。

「故推恩、足以保四海。不推恩、無以保妻子。古之人、所以大過人者無他焉、善推其所爲而已矣」

これが、御承知の如く、有名なる『孟子』の牽牛の一章の歸趣する所であります。

儒教のみでなく、我東洋の教の、西洋のそれと違つて一大特質ともなつて居るものは、いふまでもなく、私は此恩の思想であると思ふ。時によると、この恩といふことには、何もかも單に如來の御恩じや、親の御恩じやといつて、「不爲」と「不能」とを同一視し、徒らに恩に慣れ、姑息に陥ることもないではない。然し、私は常に思うて居る。眞實の恩には慣れられるものではない。恩に慣れ、また姑息に陥るやうでは、未だ以て眞實の恩を知つた人とは

いへぬと申したい。何せならば、恩の本源には、常に私共がじつとして見て居られぬ所の私一人への大なる犠牲的活動が潜在して居るからである。そこには常に犠牲的精神が活躍して居る。この故に、その本源をたどる時は、眞實難有いの念のうちには、忍び難い尊き情緒が我胸中にもえたとて居らねばならぬ。學生は親から月々支送りをうけて學問して居る。親が金を送つて下さるから難有いでは、まだ能く親の御恩を知つたものとはいへぬ。げに、この頂くその金は、老人の親が我爲めに日夜苦勞し、自分には常に不自由をも忍びて送つて下さるのである。一厘の錢も親の苦勞の汗脂だ、所謂犠牲の變形だと思ふたら、じつと、唯享けて怠けては居られぬのである。宣王は、牛の犠牲に供せらるるといふのをきいて、之を羊に易へよと申された。生を見ては、その死の忍びがたきが爲めである。羊もまた生命あるにあらずやとの反問をうけて、そこに、宣王は自己の矛盾を感せられました。が、忍びがた

い的情は、大王の實驗である。矛盾があらうが、なからうが、忍びがたいから、忍びがたいのである。眞實活動の生命は、實にこゝに在る。そこで孟子は、その生命ある心を捉へて、その忍びがたいその心が仁の術である。道は實にその心の上にあると申されたのである。所謂、眞實の恩の思想は、常に犠牲的精神の上に基きたるものでなければ、空虚である。我等が生々活動の源泉たることは出来ぬ。然るに、世界のすべては、どうであるか、犠牲的精神の表現である。能く考へて見ると、全く私一人の爲めの犠牲としての表現である。私共は、一生涯には、何頭といふ牛を犠牲として存在して居る。一口に、何十匹のチリメンジャコを犠牲としてその生活をついて居る。之を大にしては國恩、師恩、乃至父母の恩等によつて活て居る。この故に、若し世の中に生命を以て最も尊いものとするれば、犠牲はその尊い生命をさし出すことであるから、世にこんな尊いものはない。私共は、その尊い犠牲中に

生て居るのである。此頃、世間でも、少々づゝ、難有いとか、また御恩とか或は、また感恩の生活とかいふことをいふやうになつて來た。國家の上よりもまた人道の上よりも、私はこんな嬉しく賀すべきことはないと思ふ。御恩、難有い、かたじけない等の思想は、すべて我國の道を中心であつてまた凡ての道の中樞である。然かも、そのもの、奥には、常に犠牲的精神の表現を控へて居る、恩に慣れ、姑息に陥りたりするのは、その奥にかゝやく此生々活動の精神を忘れて居るからである。我他力教の報恩謝徳、即ち、難有い、かたじけない等の生活も、我本尊たる阿彌陀佛及宗祖親鸞聖人の犠牲的精神の活躍を認めぬ間は、力ある人生生活の原動力たることは出來ぬ。そこで、我聖人も、常に「佛願の生起本末をきけ」と仰せられた。畢竟すれば佛願の生起本末は、御恩の本源たる犠牲的精神の開顯であるからである。

第五章　ヂレンマ

自己は他の生命によつて活て居るものである。誰でも、現在自己の生存といふことを考へて見ると、どうしても此世は犠牲的精神の發現であることに考へ及ぼさずには居られぬ、従うて、何人も一人として自分が自分の力で活て居るものでなく、他の犠牲的精神の活動即ち他力の恩恵に活て居ること、なる。然らば、世間には、自力といふことはあるかも知れぬが、自力生活といふことは、徹頭徹尾ないのである。生活といへば、皆な悉く他力生活でなければならぬ。

さて、此他力生活の語は、此頃いろくくに、用ひられて居るやうである。私は、茲に正さしく如來の本願を開顯して、他力生活の意義を明かにしたい

と思ふ。

全體、此他力といふ語は何時頃から信仰語となつたかと申しますのに、今日まで多くの人々は、天親菩薩の『浄土論』を註釋なされた支那の曇鸞大師の時からだと申しますが、私はこれよりは、その實つと前であるやうに思ひます。天親菩薩の兄さんに無着菩薩といふ方がある。此方は、我他力教の根本教典たる『無量壽經』の附屬をうけた彌勒菩薩の繼承者であつて、その著書のうちに、『大乘莊嚴經論』といふ論があります。その論は拾三卷二十四品より出來上つて居ますが、その第拾一品明信心には信仰の種類を十三種に分類して居ります、即ち、已生信、未生信、正受信、似受信、他力信、自力信、有迷信、不迷信、現前信、不現前信、聽法信、求義信、及び觀察信であります。他力といふことを信仰語として使用したのは、先づこの論位が初めていあらうと存じます。而して、その語は親鸞聖人に至つて、最も明白に定義

せられました。云く、「他力といふは、如來の本願力である」と。他力教即ち親鸞聖人の他力教の他力とは、如來の本願力をいふのである。

然らば、その本願はといへば、いふまでもなく、『大經』上下二卷の正所明、それがそのまゝ本願である。『大經』は、何も外のことを説いたものでなく、如來の本願力を開顯したものであります。そのうち、上卷下卷の別は、上卷は如來淨土の因果、下卷は衆生往生の因果を説いたものだと言はる。即ち、我等が往生の因果が本願力に依るのみならず、我等が親の如來も本願力によつて、自から一切衆生を救済し得る佛となることが出來、その淨土そのものも如來の本願即ち無漏清淨の願心より發起したものである。然らば、そこに往生することは勿論、往生したならば、またそこで享受する所のものは、皆な悉く如來の物ならざるはない。何せなれば、極樂淨土は、我爲めに如來によつて準備せられ、且つ我等に與へらるべく成就せられたる因願

酬報の土であるからである。そこで、往生が他力であるのみならず、死後その土に於ける我等が靈的生活は、いよいよ以て丸々他力である。所謂、如來より如來の願心より出來上つて居る土を與へられ、樂みを與へられ、如來の御力によつて、我等は無量の生命に活くことが出来るのである。此世五十年の生命の持續にだに、私共は既にいふが如く、少なからぬ生命を我犠牲として活で居る。されば、我等が生きんとする欲望——長へに生きんとする欲望——換言せば、無量の生命に生くるには、必ず先づ他に無量の生命を犠牲として要求して居るのである。實に我如來は、その要求に先ちて我此欲望を満足さすべく、其生命を犠牲として我等に回向し下された方である。如來の因行即ち法藏菩薩の因行談は正さしく何人にも解るやうにこの義を示したものであると思ふ、今日、我等が現在の生活が、全く他の生命あるもの、賜物である如く、また我等が未來の靈的生活も、またその如來の犠牲的精神の

賜物である。共に他の犠牲的精神の恩恵に活くるといふ點に於て、現在の生活も、また未來の生活も皆な共に他力生活といふことが出来るのである。そこで、往生のみが他力でなく、此世の生活もまた全然他力といひ得る。否ないひ得るのみでなく、我等は現に他の犠牲的精神の恩恵によつて生命を保ち家、村若くは町、國家等即ち他力によつて生活して居るものである。ところが、今此現在の他力生活に就ては、茲に何人にも誤解し易き點が種々あるから、最少し嚴密にその意義を明かにしたいと思ふ。我等は確かに親の慈悲によつて人となつた、私共は、學校に入り、教師によつて知識を與へられた、之を物質的の方よりいへば、生るゝや否や乳を與へられ、衣服を與へられ、家を與へられたことによつて成長したと共に、現今同じくまたこれら必要のものを與へらるゝことによつて生存して居る。精神上よりいふも、物質上よりいふも皆な悉く他力である。御恩のうちの生活

であることは確かである。そこで、誰だとして、父母、家庭、町村、國家及社會等と自己の生存とを無關係にして考へることが出来やうか、何れも、四圍の事々物々よりそれ／＼かけ代へのない相應の御恩をうけて居るのである。何一つ缺けても、今日までの生存は不可能であつた。然らば、生存し得しはそれらのものゝ恩があつたればこそと思はずには居られぬ。ところでそれらの恩といふことである。父母の恩、家庭の恩、町村の恩、國家の恩、社會の恩、さては、衣、食、住の恩等とそれ／＼個々別々のものゝ上より種々の恩をうけて居るといふことまでは、何人にも異義のないことと思ふ。が、すぐと、他力を云云する者はその外に如來の御恩といふことをいふ。如來の御恩とは、つまり、今いふ個々別々のそのものを離れて世に何等か特殊の恩が存在し居るのか。さうでなく、日々夜々さきにあげたものゝ御影で活て居ることを如來の御恩といふのか。——いひ換ゆれば、父母乃至四圍の事々物

々はそのまゝ、如來よりの賜物か、従うて活て居るのは、如來が活かして置いて下さるのか。いや、さういふことではない。事々物々の恩恵が、そのまゝ、如來の賜物か、さうでないかに拘はらず、さういふことに必然的に悦ばれ得るその能力が他力信念の本質であるといふのか。これらのことは、今日少々話をきゝかけて信仰問題につまづいて居る人々には、最も興味ある問題であると思ふ。

そこで、先づ私は先きに少々申しかけて居た如來の本願といふことからこれらのことを考へて見やう、全體、如來の本願は何のために起つたかといへば、いふまでもなく、親の如來が苦惱の有情をあはれみ給ひしが根本動機である。どう憐み給ひしかといへば、此三界は苦の塊である。無常の世界である。我等が有漏雜染の業の結果であるから、今之を如何ともしがたい。この故に、如來の淨土は、此土に立てられなかつた。無漏純淨の心よりして新ら

しく三界超越の境に立てられたのである。その淨土に迎へるといふのが如來の本願である。然らば如來の御恩といふことは、先づその境界及びその境界に迎へとつて下さるといふその所に於て語るべきは勿論である。如何に、この世の上に於て、四圍の事々物々の上に雑多の恩恵が認められても、その起原とか創造とかいふことに就て如來の御恩を語れば、決して、此世の境界及び此世にて我等が四圍の事々物々よりうくる所のものは我爲めに如來が豫め創造し、また如來が與へ給ふ所のものではないこととなる。外教にて神の意匠より出來たといふ此世界は、佛教では如來の本願から創立せられたとはいはぬ。如來の本願から建立せられたものは、此世の世界でなく、唯あの世の極樂のみである。極樂。この世を超越したる極樂は、全然如來の意匠にかゝつて居る。如來は我等が爲めに、淨土の世界を豫め創造して下されたのである。『毘陀經』でも、世界の實在を犠牲から説明して、ブルシヤの分身

をいふが如く、此世界をば如來の犠牲的精神の發現であるといふことも、或は、ある意味に於ていひ得るとするも、それはその起原とか創造とかいふことよりさういふのではない。この意味にていひ得るものは、唯三界超越の淨土のみである。従うて、一切如來の賜物といふことも、往生の後には彼土にては、はつきりといひきることが出来るも、何とか多少意味を制限するか變更せずには、此世界ではいひ悪いこととなる。既に淨土が三界超越となればまたその如來も超世間の方とならねばならぬ。此世界の事々物々にその身、その心を表現するといふのではなくて、彼の淨土にすべてを表現したまふといふの外はない。さうなれば、人生四圍の事情等からうくる所の事々物々の恩は、如來の御恩でなくして、事々物々の御恩である。如來の御恩は、それとは全くその本性を異にする所の如來淨土の因果、衆生往生の因果を誓はせられた所の本願他力そのもののみである。これは、極めてはつきりして居

り、またそれに違ひない。が、さうであるからとて、既に十方を攝し盡すと
いふその廣大の御恩を私に三界超越の境界のみに限るといふのは、底なき御
慈悲に底を入れ、無碍の如來を有碍とするのではなからうか。また既に、人
間に生れさせて下されたのは、炎王光の御利益ともいひ、横截五惡趣の御慈
悲をももの語る已上は、此土にて事事物々よりくる恩は、事々物々の恩で
あつて、全然それと如來とは關係ないと斷ずるのも、これまた一種の自力の
偏見ではなからうか、一紙片だに佛物よと頂ぎ給ひし蓮如上人の、襟をたゝ
いて南無阿彌陀佛に身をつゝみてよと仰せられたのは、恐くは譬喩といふこ
とではあるまい。「自力にかゝはりて、徒らに火宅にあらんことを思はざれ」。
自力のひが思ひをあらためて、他力を信ずることを、ゆめゝ迷ひをひるが
へして本家にかへれともいひ、歸去來魔境にはとまらるべからずとも釋す
る。これが争ふべからざる事實であると共に、「身を極微にくだきて見るとも

報佛の功德のそまぬところあべるからず」。「心を刹那にちはりて見るとも彌
陀の願行の遍せぬところなし」といふではないか。然らば、この世の他力生
活の本源たる四圍の犠牲的精神の發現の上にも、報佛の功德のそみ、彌陀の
願行の遍し居るといふことは、決して一單なる空理空論と排することは
出来ぬ、若し、排し得るとしたならば、何等の關係もなき三界超越の淨土や
我今日の生活に聊かも關係なきその如來を我等は如何にして信じ得ることが
出来るか。その御慈悲を味ひ得ることが出来るか、絶待を味ふには、我等に
あつては相待までそれが下らなくては、絶待を絶待として味ふことは出来ぬ
酒樽に密閉せられたるその酒は、栓を抜けば四圍の空氣と混ざるから、最も
嚴密なる意味にては全然酒樽の酒と徳利にうつした酒とは同じといふことは
出来ぬであらう。が、密閉の酒樽のそのまゝでは、どうすることも出来ぬ。
徳利にうつし、杯に盛つて初めて酒樽の酒を呑む人は味ふのである。絶待の

浄土が、この土でないことは勿論である。何も、此世での衣食住位の恩をこ
 れが如來の御恩ぢやとのみ思ひ、絶待の如來の大恩はその實、それらの事々
 物々を離れて嚴存することを忘れたら、それこそ如來は我等か浮世の世話人
 となり、畢竟すれば、パン製造人の一手運搬人たるにすぎぬ事となる。勿體
 ない。が、超越三界の浄土と超世の本願の酒樽の酒の話のみでは、どうして
 その御慈悲の酒に酔ふことが出来やうぞ、單に、概念としての如來なれば、
 それでも考へられぬことはない。我等は、概念の如來では長へに救はれるも
 のでない、如來即ち我等が御恩をうけつゝある所の如來は、パン製造人でな
 いと共に、また概念の如來でないことは勿論である。私は、茲に昔の目的論
 と機械論との爭論を思ひ、近くは、西洋の神學者の神の意匠論を想起せず
 は居られぬ。

昔の神學者は、頻りに神の意匠といふことをいふた。此世相の萬事餘りに

適應し居るのを見て、此世界は全く神の意匠から出来て居ると認められたのであ
 る。認められたのみでなく、神を知らしめ、その尊きことを信せしむる爲めに、
 つとめて世相の上に不可思議の意匠のあることを説き示した。愛の世界であ
 ることを凡てのものゝ上に説いたのである。が、此意匠の考は遂にダーキン
 氏によつて飽まで破棄せられた、彼は、不可思議の意匠の世相は皆な悉く神
 によつて企てられたものとすれば、この世は反て意匠者の意匠の善なること
 を示すよりは、寧ろ惡なることを示すといはねばならぬといふて居る。そこ
 で、事々物々の上にのみ個々別々に四圍の境遇の恩寵を説きて、如來の恩寵
 を人々に説き示し、人生に於ける如來の御恩及び救済をそれでもつて、道理
 上説明しやうとする所の恩寵觀ならば、昔の神學者が意匠論によつて、反
 て神の不完全等を世に示したと同じく、畢竟すれば、また同一運命に陥るこ
 とである。彌陀教では、その實此世ならざる如來の浄土といへども、單なる

自由の意匠のみで出来たものではない、如來の願心より莊嚴したといふもの、そのこれにまで達する過程はといへば、因果の條件を無視しては居らぬ、法藏の因行談は即ちそれである。況んや、此世界となつたら、いよくさうでなければならぬ。然らば、我如來は、之を世の實相中に認むることも不合理なれば、また、どこどこまでも、此世から超越的なものとするのも不合理に陥る。然らば、道理や理屈は、どうでもよいが、人生生活の問題の決着は畢竟どうなるであらうか、一切は如來の附與にして、何事も一切皆その御計らひか、或は又然らざるか、我如來の精神は、此現實世界の個々物中に聊かも隠す所なく、その目的を表現して居るか、どうか。こは、大問題であるが私はこれについては、極めて簡単に答へ得るものである。吾人のいふ所の他力生活の問題は他の力の起原や、また此世界及び事物等の依つて生じたるそのもの、起原の研究ではない。それが、精神的なものであらうと、或は物質

的なものであらうと。事々物々のうちに如來の意匠が込められて居らうか、或はなからうか、それは何れにしてもよい。實際上、他のもの、犠牲的精神の恩恵によつて生存するから、他力の生活は、そのまゝ、感恩の生活だと申すのである。その實、如來が凡てを與へしか、或は又此世の親等が與へたのかまた自然か因果かにかゝはらず、與へ手は何れにもせよ、與へらるゝことによつて活て居ることは事實である。即ち、犠牲の恩恵のうちに我々はその日その日を送つて居ることは決して空論でない、生命は、常に生命の本源である。犠牲は一つ一つ考へなば、一つ一つに生命の本源たることによつて絶待の價値を有して居る。たとひ、之を外から見れば相對的のものなるにもせよ。我等が絶待の價値を認めて居る我生命の本源たる已上は、そのものもまた絶對的のものとなるのである。人間は概念に生くることは出来ぬ者である。此世界と及び我此人生とを超越したる如來に接したならば、自己が此上

に居る間は、すぐその如來もまた現實界に我と共に來らねばならぬ。「心は淨土にすみ遊ぶ」身には、我如來もまた此土の上すみ遊び給ふこととなるのである。茲に初めて必然的に與へられたる信念の力によつて事々物々の恩惠から如來の恩惠を知ることが出来る。事々物々を通して佛陀の慈悲に接することが出来る。「他力といふは、如來の本願力である」。此事は、一步も動かすことは出来ぬ。今は、その本願の尊さをも、事々物々を通して味ふことを悦ぶのである。かゝる身となつて見れば、『大經』上卷の淨土か本願の表現たるのみならず、下卷の「天下和順、日月清明」の天地までも、攝衆生願中の表現と見ゆるのである。されば、慧空講師も、かういふて居らる。「攝衆生の初を宿善とし、攝衆生の終を往生とすべし。是は當流一途の所談也されば、過去の宿縁も現に煩惱具足と信知するも、是が阿彌陀佛の本願の衆生を攝受し給へる御恩也。されば、宿善と深信と相違の義にあらざる也」と。

心内の光景既に然る上は、心外此世界の光景も、またさうでなければならぬ事となる。そこで、慧空師も、また進んで、かくの如く告白して居らる。

「天に三光あるも佛恩也。地に百穀あるも佛恩也。雨のふり、水の湧く、火の熱し、風の養ふも佛恩也。一花の開き、一果の成る、一葉を採り、一株を出すも佛恩也。山野に途を開き、江河に舟を作るも佛恩也。絲竹の音曲を出し、藝能の淨樂を爲すも佛恩也、又目の視、耳に聴く、口に言ひ、身の動くも佛恩也。一衣を着、一味を味ひ、一命を全うし、一生を終るも佛恩也。病癒え、災除かれ、眷族を得、資具を得るも佛恩也。惡鬼毒龍、世を損せず、毒藥利刺、人を害せざるも佛恩也。父を知り、子を知り、善を知り、惡を知るも佛恩也。一字を聞き、一句を解し、世善を作し、出世を願ふも佛恩也。

凡そ、是れ冥々たる黒闇の外、人間天上、依報正報、微善微樂、悉く皆

な佛恩ぶつおんの然しからしめざることなし。是こゝを以もつて、『智論チロン』に云いはく、一切衆生いっさいしゆじやうみ、皆みなな佛恩ぶつおんを蒙かうむること、一世いつせ是かくの如ごとく、萬世まんせ亦また爾しかなり。乃至ないし、吁あ、痛いたましき哉かな我等われら幾千いくせん年ねんか佛肉ぶつにくを食くひ、幾千いくせんか佛血ぶつけつを吸すひ、幾千いくせんか佛命ぶつめいを斷たち、幾千いくせんか佛眼ぶつげんを挑えぐり、幾千いくせんか佛肩ぶつけんを拄けつり、幾千いくせんか佛皮ぶつびを衣きつる。』

(慧空講師「讀佛慈悲集」)

私わたくしは、今いま此この慧空講師エクラウカウシの告白こくはくを以もつて、他力信念たうきしんねんの極致きよくちとするともと共に、犠牲的ぎせいてき精神せいしんによつて體得たいとくしたる他力生活たうきせいかうの實感じつかんと仰あほぐことである。

第六章 琴

琴師ことしが琴ことを造つくるに就つて、最もつも苦心くしんするのは、琴の臺だを造つくることである。琴の臺だは、凡すべて桐きりである。そこで、先まづ琴ことを造つくるには、その臺材だとなる桐きりを求もとむることが極きばめて六ヶ敷むついとのことである。足あしにはく所ところの下駄げたでも、此こゝ頃ころは少々せうせう能よいのを作つくらうとすると、下駄屋げたやは、その桐材とうざいに苦心くしんするときいて居ゐる。然しからば、その大さおほいよりいふも琴の臺だとなつては、琴師ことしの苦心くしん思おもひやらるゝ。

さく所ところによれば、琴の臺だとなるべき桐きりは、少すくくとも二十年ねん已上いじやうのものでなければならぬとのことである。唯たゞ大さおほきがあつても、品質ひんしつが美事みことでも、二十年ねん已上いじやうのものでないと、その資格しかくがないとのことである。そこで、極上ごくじやう等とうのも

のを造らうと思へば、どうしても、五十年百年となつたものでなければならぬ。

さて、もう一つの定件は、その桐の生長した場所に就てである。同じ大根でも尾張や練馬で出来た大根は、外の大根よりも味がよい如く、此桐にも、その生長した場所によつて、非常に適不適があるとのことである。琴の臺となるべき桐は、どういふ所で生長したのがよいかといふに、琴師の経験によると鐵路とか工場等のあつて、非常にさわがしい所に生長した所のものは、よくないさうである。どういふ所がよいかといふに、静かな山寺の境内位で長くかゝつて生長したのがよいさうです、殊に、山寺の鐘樓堂の傍位で生長したのが、極めてよいときいて居ります。私は、此事實は、餘程興味多きことと存じます。無心ながらも、朝晩小僧さんが撞く所のお鐘の音をきいて、その響がその木目に沁み込んで居るが爲めではなからうかと存じます。何れ

にもせよ、最もよき所の琴の臺を造るには、かやうな苦心を要するとのことであり、造る所の琴師が、かやうな苦心を要するのみならず、名琴の臺となるべき桐は、決して一年や二年で出来るものでなく、桐そのものも百年間も風雨にさらされて苦勞に苦勞を重ねたものであることを示して居る。

同じくきいた話ですが、西洋の樂器、バイオリンの胴を造るについても、またこれに能く似た話がある。西洋ではナポレオンがアルプス越をしてから能きバイオリンが出来ぬやうになつたといふことださうです。それは、その已前はアルプスの山頂にある所の木材をきり出す、それが段段と谷底にころげ落ちたのを伊太利に持つて來て造つたものださうです。ところが、紀元千八百年に、ナポレオンがセントベルナードを越えてからは、自然に持ちこぶに便利な途がついて、どしどしその木材を出すやうになつて來たのである。同じ木材でありながら、それから已後は、どうも好いのが出来ぬことゝ

なつた。能く考へて見ると、その已前は、木材が段々と谷底にころげ落ちるその間にその木材に何等かの變化が生じたに違ひない。思ふにその變化に必ず音響は關係するに違ひないこと、考へられた。よつて、學者達が集まつてその頂上から谷底にまでころげ落ちる回轉度数等を計算して、木材に同一變化を機械的に加へて見たさうです。ところが、結果は、全く不成功に終つたのである。そこで、西洋では、ナポレオン已來、立派なバオリンが出来ぬといふのださうです、この話も、私は前の琴の臺を造る桐の話と同じく、すべて微妙な變化は、自然的であつて人為的又は機械的に出来るものでない。長き年月と一方ならぬ苦勞とによつて無爲識的に賦與せらるるものであることを教へて居るやうに思ふ。

これらの話は、機械でも、その最も微妙なるものになると、唯機械的に出来て居るものでないことを示して居る、そこには、目に見へぬ苦勞が含み、

人知れの犠牲が拂はれて居るのである。況んや、機械的ならざる生命あるものに於てをやである。すべてを外觀し機械視する所の今日の學問智識は、常に此目に見へぬ一項を見落して居るのである。

第七章 苦勞味

東京巢鴨といへば、すぐ誰にも東京市の植木の供給地として知られて居るまた、練馬等と同じく、大根、野菜も能く出来る。よほど、地味がよいと見へて、大きくもあるが、また味もよいのである。

嘗て、巢鴨郊外を散歩した。百姓衆が、梅の枝の尺位な管を畑一面にさして居たのである。柳などは、自分の地方でもさして置くと穿をふくのであるが、未だ梅の枝をさすといふことは知らぬ。その時、梅もまた柳の如く、之をさして置けば芽をふくものかと思ふた、程なく、その處を通つて見ると、不思議や、何れも何れも芽をふいて、先きに枝の管であつた梅が、今は皆な悉く一本の梅の木となつて居たのである。私の地方では、根があつてすら、

時々枯れやすき梅の、かくの如くさしてすらも能く芽をふくのは、全くその地味の饒かなるが爲めであると思はずには居られなかつた。

あゝ、大根、蕪の味のよいのも、或は梅の枝をさして芽のふくのも、皆なこれ巢鴨は、他と異つて地味がよいからである。そこで、また植木なども能く出来て、東京市の植木が多くこの村から供給せらるゝのも無理はないと思ふたのである。

その後、また巢鴨の郊外を散策して、私は百姓衆の畑に出て働いて居るのを見た、その時、先づ私を驚かしめたのは、若い青年も、また、まだうら愧かしげなる嫁さんも、手づから人糞の肥料を桶から、つかみ出しては畑の畝にうめて居るのを見たのである。その臭氣といふたら、到底近くことも出来ぬ程であつた。が、御當人達は一向氣にもかけずに、之を手につかみては、野菜や植木の根にうめて居るのである。思ふて見れば、毎日午前十時頃、東

京小石川から巢鴨へかけての板橋街道は、雨がふらうが、天氣であらうが、肥桶の車がついて居る。時々、黄金の花が地上に咲きて、道行く人は進退きはまる時もある。常に、私はどこに持ち行くのかと思ふて居たのに、巢鴨の人達は朝早く起きて野菜等を市に持ち出し、その代りにかやうに日々市内の大小便を貰うて来るのであつた。それを土壤と混化して肥料とするのであつて、その肥料を絶えず畑にやるから、巢鴨の地は他にくらべて大變に地味がよいのであることが分つたのである。すると、大根や蕪の味のよいのも、或はまた梅の枝にまで芽をふいたり、根の出るのも決して偶然ではない、地味は、始めから饒かなのではない、その饒かなのは、全く巢鴨の百姓衆が、苦勞を苦勞とせず、絶えず人の近くのも厭ふやうな人糞の肥料をば手づからその畑の畝に埋めるからである。然らば、大根にも蕪にも他に得られぬ味のあののは、全く百姓衆の苦勞の賜物である。梅の枝をさして置きて、芽が出

たり根がつきて植木となるのは、一往不思議であるが、また決して不思議でない。その土地には、人知らぬ犠牲即ち苦勞の肥料が絶えず埋められつつあるからである。

可愛い子には、旅をさせよとは、昔からよくきく語である、大根や蕪ばかりでなく、人間も旅に出ると苦勞をせなければならぬ、苦勞をすると、能く人情を味ひ、また能く味のある人間になるからである。養子でも嫁でも、自分の家にも居て苦勞を知らぬものにはどうも、不縁となるのが多い。苦勞をした人はやはり、能く六ヶ敷家に參つても能く根がはへて花が咲く、同じ鯛でも、大海の荒海にそだつたのと、入江でとれたのとくらべるとその味は比較にならぬ、荒波で苦勞をした鯛は、實に味がよい。日々、御飯の時になくてならぬ澤菴漬でも、丸い大根の四角になるまでも重い石のおいてあつたのは、誠にいふにいはれぬ味があるが、重しの石の軽いのはたべられぬ。杉

の木も、奥山で何本となく込み合うて苦勞した木でなければ素性のよいのはないとの事である。さうすると、何事でも、何物でも苦勞は最も必要なことである。苦勞によつて、すべてのものは出来、苦勞によつて凡てのものに味ひがつくといふてよい。

昔、徳川時代樂譜の家元を定むるには、その家元が四軒ある。その一である所の觀世流についてきいた話であるが、初代觀世が三代觀世を仕入れるには、それはそれは心を盡したものだとの事である。あけても、くれても師匠は、「高砂や」のみを教へてその他を教へてくれぬのである。至つて短い「高砂や」の謠曲を五年間習はしても、まだ外のを教へぬのである。昨日も「高砂や」、今日も「高砂や」、あけても、くれても、「この浦船」ですから、二代觀世も根が付き、謠曲は内百番外百番ともさくのである、たつた一番の謠を五年も稽古して居ては、何時卒業が出来やうぞ、大變にまだるく思つて

京都の先生につきて學ばんと、遂に夜逃げをしたのである。東海道は、一夜尾張から桑名へと船で渡つた、丁度、その夜が明月の夜であつたから、えもいはれぬ興に促されて、我を忘れて船上、「高砂や」を歌ひ出した。すると最前よりきいて居た同舟の一老客、誠に感にたえず、謠ひおさむると、もう一番是非にと請はるるのである。そこで、覺えたのは、唯これだけである、この外は知りませぬと答へた。が、いや、唯今の一番、餘程の妙手でなければ出来る筈でない、所望所望といはるので、止むを得ず、實は自分ばかりのものはものであると、その一部始終を物語つた。その時、老人の客は、流石は觀世の家元だ、五年間に唯一曲か、京都の先生とは、誰あらう、私じやあなたは、そんなよい御師匠をはなれて、どうなさる。わしも若かつたら、弟子入もしやうが、もうかう老いては致し方もない、早々御歸りなされと、それから手紙をつけてかへされた。初代觀世は、それから、尙ほ二年間「高

砂や」を教へたさうである。二代觀世は、七年間、苦勞に苦勞を重ねて、やうやく、「高砂や」の妙手になつたとの事である。唯歌ふのみならば、一日でも覺える事も出来やう。然し、その妙手となるには苦勞に苦勞を重ねなければならぬ。すべてのもの、味ひが苦勞から生ずる如く、もの、音色の味ひも、また苦勞の賜物である。

佛蘭西に盲人の畫工があつた。この畫工は、その目の盲て居るにかかはらず、極めて色彩の配合が美妙であつた。多くの繪の具を指でつかみ出して指分量で配合するのであるが、それはそれは精妙な色彩を出すのである。そこでその色彩法を後まで傳へたいといふので、その指でつかみ出したのを、人々が一々精密な天秤にかけてその通りにして、配合して見たさうであるが、どうしても、器械にかけてした配合では、その通の色彩は出なかつたといふことである。こゝにも、盲人の長々の苦勞の經驗がその色彩を出すのであるこ

とを示して居ると思ふ。

然らば、食物の味ひ、音樂の妙味、或はまた繪畫の色彩等何れも何れも、ものは唯一時器械的に早業には出来るものでない。そこに澤山な犠牲が拂はれて居る。そりや、形は出来やうが、味ひのあるものは、苦勞に苦勞をかさねば出来るものでない、寫眞の器械にかければ、實物通りにものがうつる。然し乍ら、之を名人の畫工の繪にくらべると、何となく味ひがない。近時流行の造花は大變に美事である。然し乍ら、造花には、精氣がなく、少しも味ひがないのである。

世の中は、段々と進歩して年々歳々自然界を應用して、人々の力を用ゐず大きな事が出来るやうになつて來た。文明は、昔、多くの人々が苦勞に苦勞をかさねてしたことが、今は手軽く器械でするやうになつた。従うて、人々苦勞をいとひ、成るべく懐手で以て成功したいといふ考が多くなつた。ま

た、器械にさせるから、何をして貰うても、難有いといふ念が多く起らぬやうになつた。文明は、器械を用ひる所から、器械ならざる人間までも漸次器械視するやうになつて來た。茲に現代思想は、益々人をして苦勞を厭はしむると共に、一切を器械視せんとして居るのである。所謂、夫は妻を、子は親を、國民は國を、家族は家を道具視せんとするの弊は、日に月に加はりつゝ、命あるものは造らるゝものではない、況んや、味ひのあるものは、器械や道具からは生れてはこないのである。否な私共は如何なる器械や道具にも、常にその背後には人知れぬ人の苦勞が加はりつゝあることを忘れてはならぬ。汽車や汽船も、決して石炭と汽關とのみでは動かぬ、そこには、常に堪えられぬ熱度のうちに絶えず火夫の苦勞を重ねつつあるを忘れてはならぬ。思ふに、すべてのもの、動く所、所謂活動する所には、その大小にかゝはらず、そ

ここに何等かの犠牲、何事かの苦勞なきはないのである。すべて人間の不平不満は、常に身の苦勞を厭ひ、他に人知れぬ大なる苦勞の我爲めに拂はれつゝあることを知らぬ所から生ずるのである。然らば、平和満足の日暮は、犠牲即ち苦勞することと、人知れぬ大なる苦勞の我爲めに拂はれつゝあることを知ることによつて生ずるものである。

我佛敎は、大に分つて二つとなるのである。その一は自力聖道の敎である。その一は、いふまでもなく、他力淨土の敎である。これを、難行道、または易行道とも分つてある。そこで、難行自力の敎といふは、種々の行をつとめて、苦勞することによつて佛になる敎である、易行他力の敎は、犠牲即ち人知れぬ大なる苦勞が我爲めに拂はれて居ることを信知し感謝する所の敎である。聖道の人々は、その苦勞によつて、この人世を淨土とまで味ふのであるが、他力敎では、どこまでも、自から自力難行の苦勞が出來ぬから、この土

は穢土である、然らば、我この心を樹立すべき所は、唯佛心の大地のみである、佛心の大地には、五劫永劫、人知れぬ大悲の御苦勞が施されてある。〇慾覺、眞覺、害覺を起さず、慾想、瞋想、害想を生ぜず。それは〇人知れぬ御苦勞が重なつて居る。今日末法の冬枯れに、願往生心の芽の吹くのは、佛心の地味がよいからである。如何に煩惱の風は強くとも、少しも我心の動かぬのは、深く〇佛心の大地に根ざれて居るからである。親鸞聖人は、大悲の願船に乗じて、光明の廣海に浮ぶと仰せられた。これ實に苦勞味に生きる人々の信後の風光である。

第八章 己が姿

鎮守の宮に繪馬の額がかけてある。

今は死んで居らぬが、何日も夏休みとなつて國にかへると、もうお休みになりましたかといふて遊びに來たその古老の話によると、社殿の繪馬には、かういふ因縁がある。

その村には、馬の繪をのみかいて居た繪師があつた、一生涯に一枚どうか我精神をこめた馬の繪を畫きたいといふのがその繪師の宿願であつたさうである。村の若衆が繪馬を鎮守の宮に奉納したいといふので、その繪師に馬の繪をたのんだ、繪師は、我宿願満足の時到了と思ふたのか、大へん之を悦んだ。齋戒沐浴の上、一匹の野馬をかき上げて、之を鎮守の社殿に奉納し

たのである。その年の夏から、何ものとも分らず、野田を荒らすものがある。麥が黄ばむと麥畑を荒し、豆が實ると豆を荒らすのである。誰いふとなく、鎮守の繪馬の馬が夜なくぬけ出ては、食を求むる爲めであるとの風説がたつた。うちには、くらい晩にその馬に出あふたものさへあるとのことである。或程繪馬の野馬には、轡と手綱がつけてない。あれでは、繪馬の馬がぬけ出るに違ひない。そこで、轡をはめ、手綱を杭にくくりつけてあるやうにかき加へたらばと、若衆の衆議一決してそのことを繪師に申入れたのである。暫くは拒んで居たが、衆議に餘儀なくされて、彼は止むなく之をかき加へた。どういふものか、筆をさしおくと同時に、その繪師が狂ふてしまつた。その後は、村の小供などから馬のまねをせよといはるれば自から馬のまねをしたり、また馬をかいてくれよといへば、ほんの形だけの馬をかき、晩年には人の軒場に立

ちて物貰ふて日を送り、それもくれる人がない時は、野田に起臥して麥や豆をなまのまゝとつて食べて居たとのことである。能く遊びに來たといふその古老はその繪師の狂人となつてから、時々その古老の家にも物貰ひに來たのを見て知て居ることであるから、そのことはさう昔のことではない、古くとも二三十年前の事實である。

お互は、自から意識して居ると居らぬとに拘はらず、胸底深く何かの宿念を埋めて居る。それを體現し或はまたその既に成就せられてあるかを見るのが人間の生活であり、また努力である。先づ、何事でもお互にすべてのことを心のうちに畫く、これだけでは満足は出來ぬ。自から之を外に體現するから然らずんば、その畫きしそのすがたを外に發見するにあらずんば、宿念の満足は出來ぬ。人間は本能的に常に繪師である。自己のすがたを描き、自己のすがたを何ものかの上に見出さんとする肖像畫家である。繪馬の繪師には、

野馬は繪師の宿念の結晶にして、そのまゝ繪師それ自身である。それについて、私は『刺青』の主人公刺青師清吉の事を思ふのである。

彼が年來の宿願は、光輝ある美女の肌を得て、それへ己が魂を刺り込む事であつた、彼は未だ見ぬ人の姿を心に描いて居るのみでは満足が出来なかつたのである。

丁度四年目の夏のとある夕、深川の料理屋平清の前を通りかゝつた時、彼はふと門口に待つて居る駕籠の簾のかけから眞白な女の素足のこぼれて居るのに氣がついた、一見この女こそ我魂をほり込む唯一の肉材であると思ふたのもも。その人の顔を見たさに駕籠の後を追ひしも、二三町行くと、もうその影は見えなかつた。

それから、一年たつた。己が宿願の自覺からいへば五年目の春も半ば老い込んだ或日の朝であつた、深川佐賀町の彼の寓居に、ついに見馴れぬ小娘が這入つて來た。羽織の裏地へ繪模様をかいて貫ひに來たのである。その小娘こそ先きに平清の門口に待つて居る駕籠の簾のかけよりこぼれて居たその素足に我魂を刺り込む貴き肉の寶玉と見たその女である。

清吉は歸らうとする女の手をとつて二階座敷へ案内した。さうして、二個の大幅の巻物をその女の前に繰り展べた。

一は、昔の暴君紂王の寵妃末喜を描いた繪であつる、今しも、庭前に刑せられんとする犠牲の男を眺めながら、末喜は勾欄に凭れて、右手に大杯を傾けて居る所である。他の一卷は「肥料」といふ畫題であつて、若い女が櫻の幹へ身を倚せて、足下に累々と算を亂して斃れたる幾十の男の屍骸を見つめて居るのであつた。

女は、初めの繪を見ては、其處に隠れたる眞の「己」を見した。どうして、こんな恐ろしいものを私にお見せになるのですといふと、清吉は「この繪の

女は、お前なので、この血がお前の體に交つて居る筈だ。さうして、女はまた次の繪を見て我と我が心の底にひそむで居た何物かを探りあてたるやうな風であつた。清吉は「これはお前の未來を繪に現はしたのだ、此處に斃れて居る人達は、皆なこれからお前の爲めに命を捨てるのだ。」

女は、白状します、御察しの通り、私は、その繪のやうな性分を持つてゐます。どうか、この繪をかたづけ下され、どうか私を歸へして下されといふた。「それを恐ろしがるのも、今のうちだ、」まあ待ちなされ、己がお前を立派な器量の女にしてやるから」と、女は魔睡劑をかけられて一室にはこぼれた。清吉は、一心こめて女の背一面刺青を施した。夜がしらくと白み初めた時、巨大なる女郎蜘蛛の動物は八本の肢を伸ばしつゝ、女の背一面に刺込まれたのである。その刺青こそ彼が生命のすべてにあつた。その仕事をなし終へた後の彼の心は空虚であつたとのことである。

湯殿にて、刺青は色あげせられ、女は魔睡から覺めて非常な苦痛に七轉八倒した。が、暫くすると苦痛のかげもとどめず、身じまひを整へて別人のやうな人となつた。

先きに見せられた繪卷を貰ふて、女は歸ることゝなつた。その時、女がいふた。私はもう今日までのやうな臆病な心をさらりと捨てました。「お前さんは、真先きに私の肥料になつたんだね。」

清吉は、歸り行く女を呼んで、もう一遍、その刺青を見せてくれといふた。女は、だまつて頷いて肌を脱いだ、折から朝日が刺青にさして、女の背は燦爛としたといふのが『刺青』一篇の要旨である。

眞の繪師は、常に墨と筆とのみで繪をかゝぬ。その色彩は皆なこれ我身の血しほである。この故に、繪そのものがそのまゝ「我」である。馬の繪師には野馬が自己である如く、刺青師清吉にとつては、五年間、まちて居たその女

の背に刺り込みたその刺青の一滴一滴は彼の命のしたゝりであるのである。然らばその之を畫きしもの、或は、狂亂し、或はその心の空虚となるのはあたりまへのことである。その精神は、畫板に入り、その魂は肌膚の上に宿つてしまふからである。人間は、こゝに初めて、自己のすがたを他のものゝ上に見ることが出来る。

自分には、直ちに自分の顔すがたを見ることは出来ぬ。唯鏡に向ふ時、初めて、あり／＼と我すがたを見る事が出来るのである。歴史は、我顔すがたを見る所の鏡である。女は、清吉が與へた二個の繪卷の女を見て、何となくおのゝき怖れて之をしまつて下されといふたのは、わが姿、所謂平生装ふて隠くして居る所のわが姿を見たからである。われらの心のうちには、人を毒する八足の蜘蛛がほりこまれてある。如何に消さうと思ふても之を我心から消すことは出来ぬのである。我大聖釋尊さへ、菩提樹下に端坐し乍らも

尙ほ何くよりか「可愛」等の魔性があらはれて來た。その實、何くよりでもない、とりもなほさずその時に於ける釋尊御自身の御心の御すがたである。又我聖人が、比叡御修行中に於て赤山明神前にて御出あひになつたその女姓も恐らくは、當時我聖人の胸に湧き立つ青春の血で畫き出されたる聖人の心の御すがたとも見ることが出来る。人間は、何れも皆な天來の繪師であり、彫刻師である。他のものを畫き、他のものを刻む所の繪師や彫刻師ではなくて、「自己」を畫き、自像を刻む所の繪師であり、亦彫刻師である。釋尊御一代の御說法は、とりもなほさず人心の上に靈の筆を以て刺り込まれたる刺青である。一切經は、昔の人の繪卷ではない。能く／＼ながむれば、屹度その繪卷のうちに我すがたを見得るのである。果して然らば『觀無量壽經』は、我家の繪卷であつてそこに、如來の大悲は、深く／＼阿闍世王の肉の上に刺り込まれて、永遠に燦爛たる光を放ちつゝあるのである。

『信卷』に、我聖人が『涅槃經』の阿闍世王の因縁を長々と御引用になつたのは、その阿闍世王が、正さしく隠れたる眞の「我」であつたからである。阿闍世王の救済がそのまゝ、自己の救済たるが爲めであつた。

世尊大慈悲 爲衆修ニ苦行 如下人著ニ鬼魅 狂亂多所爲

とは、王が獲信の告白である。鎮守の社殿の額にその魂をかき込んだ繪師は一枚の額の爲めにも氣が狂ふたのである。如來は、我爲めに狂はせらるゝまでに思ふて下されたのである。われらが、胸に浮ぶ大悲の繪姿には、あり／＼と如來の精神がほりこまれて居る。本願は如來の宿念の結晶である。我等はその大悲の本願に攝取せらるゝのである。清吉は、「肥料の畫面は、お前の未來を繪に現したものだ」といふて居るが、私は、之を今日まで多くのものを犠牲としたる我等が過去のすがたを繪にしたものといひたい。

どう考へても、此人生は苦痛である。此世は無限不自由の土である。後手にく／＼りつけられて、生と死との針でもつてちくりちくりと刺さるゝ、然し乍ら、我等はその一針一針にも、常に靈の刺青師の生命のしたゝりつゝあることを忘れてはならぬ。

第九章 行鏡三昧

自己の姿を見る鏡はといふと、私は日々の行爲動作そのものであると思ふ。「自己を知れ」との教は、古今に通じての教である。然し、その知る所の方
法順序は、未だ多くの入々の明かに説かぬ所である。自己は、手近かなもの
であるから、一寸考へると極めて知り易いやうに思はれる。が、餘り手近で
あるから、反て實際となると存外六ヶ敷い。初めての人も、他人の顔は遇
ふなり、すぐその姿かたちを知ることが出来るが、自分の顔のみは、誰人も
鏡の力を借らずには見ることは出来ぬ。鏡に映つた顔は見ることは出来ても
眞實の我素顔は、誰でも自分には生涯見る事は出来ぬのである。その如くに
我心もまた見易く知り易いやうで、なかく知り難い。唯此姿を映すの鏡は

日々の行爲動作、これが即ち自己を知り、自己の姿を見る唯一の鏡である。
佛法にては、智慧を三種に分類するのである。第一が聞慧といふて、我見
聞覺知によつて生ずる所の智慧即ち經驗である。第二は、思考力によりて出
来る所の智慧、第三は、修慧と申して、修行によつて生ずる所の智慧であり
ます、この故に前二者は、之を後者に比較すると、餘程その性質を異にして
居る。自己を知るのは、このうち何れの智慧を重んずるのであるかといふに
いふまでもなく、最後の修慧である。所謂、自己を知るには、修行といふこ
とが非常に大切である。佛道修行にては、一般に見道修道の二つがあつて、
實行上では修道といふことが最も重んぜられて居るのは、これ即ち行である
からである。自己を知るにも、私は此行によつて初めて知り得らるゝもので
あると思ふ、自己の如何なるものなるかは、唯此行の鏡によつて初めて知ら
ゝのてある。

こんなこと位と、心で思うて居ることでも、自分にやつて見るとなかく出来ない。我心でもつて思ひ定めた自己の價値は、甚だあてにならぬ。そこには常に懸値があつてならぬ。私が今自己を知るとは、現在ありのままの自己を知るのである。少しでも割引懸引があつたならば、眞實の自己でない。唯思ふたり、考へたりして知つた所の自己は、存外あてにならぬ。眞實、我を見、自己の本性、價値等を知るのは、行鏡即ち自から行ふて見るに限る。釋尊は、決して行なしでは佛陀となることは出来なかつた。その佛陀の内證はといへば、手近い所といへば、彼の誕生の偈の上にもあらはれて居ると思ふ。云く、「天上天下唯我獨尊」と。天にも地にも、自己程尊いものはないといふ自覺である。獨尊の尊の字は尊大の義ではなく、私は尊いといふ意義であると思ふて居る。

どう尊いかといふことは、轉法輪及び涅槃のお姿の上に見ることが出来る。

自分は三世の諸佛に世話になつた身であると感じてお居でになる。殊に過去七佛に對して感謝を捧げ、涅槃の時には安樂の所に到るべきことをお示しになつてある。果して然らば、釋尊成道の歴史は、天にも地にも我程尊いものなしといふ所謂「我」を發見なされた自己發見の歴史である。つまり、菩提樹下でこの覺を開くことの出来たといふのは、菩提（覺）即ち智慧の鏡によつて眞實の自己が觀照出来たのである。然かも、その鏡たるべき所の智慧は、唯道理屈の説明のものでないことは、外道の「我」の説明等をお聞きになつた時、それに御満足出来ずして、直ちに苦行にとりかゝりになつたのでも分る。

『華嚴經』は、菩提樹下に於ける釋尊の自己を擴大して示したものである。之を説かれたる教法に就ていへば、教理行果とも、或は又信解行證とも申し居る。果即ち證に至るには、行を要するのが我佛教の常である。また、之

を事例に就ていへば、『華嚴經』では、善財童子、『法華經』では、長者の窮兒である。何れもその親にあふまでには、種々の苦勞を重ねて居るのである。小田原の感化院には、入口に大きな鏡が掛けてある。何の爲かと申せば、若し不良少年の此前に立つ時、聊かにも自己の姿勢を正すものあれば、その少年は感化の見込があると、之を見定める爲めの鏡だとかきいて居る。これまた、自省力の有無を鏡でもて試験するのである。

地獄に參ると、閻魔王の前には淨玻璃の鏡といふのがあつて、罪人は、必ずその鏡を見せらるゝときいて居る。その鏡には、不可思議の力があつて、自己が過去になした所の凡ての行爲が、そのまゝうつて居るとのことである。つまり、過去世に我惡業をなしたつゝあるその自己をまのあたり見ることが出来ることである。そこで、今まで他をうらんで居たものも、墮獄は全く他のものがさしたのではなくて、自業自得であることが知らるゝといふて居る。

もう既に地獄に墮ちてからではおそい。私共は、この世にあるうちに自己の姿を知り、自己のありのまゝ、を行の鏡にかけて見ねばならぬ。

雲棲寺の株宏禪師は、或は蓮池大師とも號して、支那では明朝での有明なる人である。この人には澤山の著書がある、そのうちに『自知録』といふのがあつて、その題の示すが如く、自己を知る所の方法を示した記録である。二卷あつて、上卷には、忠孝、仁慈、三寶功德、雜善を善門として分類し、下卷は、過門と名けて、不忠孝、不仁慈等と前と正反對の行爲がかゝりてある。つまり、かやうな行爲表を作つて置きて、日々我行爲に點表を附したものである。然かも同一行爲でも、その精神、また客體の違ふことによつてその點表を別に附したるが如きは、如何にその用意の周到なりしかが察せらるゝのである。株宏は、此等の善禍二門の點表を日々つけて以て月末に之を計算してその點表で以て自己の如何なるものなるかを知つたのである。これまた、

先きに度々いふ如く、自己の行爲によつて自己を知るのである。

板倉重宗は、所司代をして居た時、人々の訴をきく時には必ず西方に面して茶臼をひきながら常にきいたと傳へて居る。き了つて、先づその茶を點じてその茶の細かさによつて我心の静かであつたことを判じ、粗き時は我心の然らざることを知つたとのことである。これは、茶の細粗によつて自己を知つたのである。

秩父の庄司重忠は、悪七兵衛景清のありかを知るか知らぬを知る爲めに、阿古屋に對して琴を弾じさせた。これ即ち琴の音によつてその心を判ずるのである。

昔の江戸、今の東京に眞宗の信者があつた。ある時、親鸞聖人の御舊跡を參拜してめぐる所の巡禮者所謂二十四輩を止宿したのである。その家の主人夜半に御内佛に參詣して見たれば、二十四輩は宵のうち殊勝に佛前に念

佛して打ち喜んで居たのに、あらうことか御内佛の方へ足をさし延べて熟睡して居るのである。

主人、之を見て涙を流して思ふやう、「あゝ、我昔のすがたを見せて下さるゝ」と喜び、念佛申した。

その後、此主人に懇意の同行が京都に參詣しました。序でに、時の御講師香樹院に此事實を申上げたれば、何故か、講師香樹院は眉を擡めて「それはおれの心中と全く違ふ」と申されたとのことである。

此同行歸國の上、彼の江戸の主人に右の趣を語りきかせた。主人の同行は大に驚いた、「我心中と御講師様の御心中と違うては大變だ」と申して、早るものもとりあへず、直ちに上京して香樹院師を御學寮にお訪ね申した、早速面謁がかなうたから、その旨を先づ御尋ね申し上げたれば、香樹院師はかく仰せられたとのことである。「その許は、昔こそ御佛に足さし出したれ、今

は如來様ニヨライさまと眞向まむきにて日暮ひぐらしさるゝさうなが、わしはなあ、今いまでも如來様ニヨライさまに時々ときどき足をさし出し、背せな面かむ向むけて暮くらす日ひが多くて困こまる。その度たびに、あやまりく念ねん佛ぶつするのじやが、そこ許もとは昔むかしばかりか。それは感かん心しんなものじや。わしの心こころ中ちゆうと違ちがふといふたのは、これじや。と。彼かの同どう行ぎやうは、自みづから驕けう慢まんの巔いたに登のぼつて居かたことに心こころづきて深ふかく慚ざん愧きしたとのことである。

香樹院カウジュカンの鬼おにの念佛ねんぶつの畫讚ぐわさんに

われさへも御名みなを唱となふる身みとなるに

鬼おにの念佛ねんぶつあやしからまじ

といふのがある。誠まことに、尊たふとい話はなしである。

香樹院カウジュカンも江戸エドの同どう行ぎやうも、同おなじく我われを二十四輩はいいの寢ねすがたの上うへに見みたのである。然しかし乍なら、江戸エドの同どう行ぎやうは、之これを過くわ去この我われすがたと見み、香樹院カウジュカンは、近ちかく之これを我われ現在げんざいのありのまゝのすがたと御覽ごらんになつたのである。

伊勢いせの大廟たいびやうには、誰たれも知しつて居ゐる如ごとく三種しゆの神器じんぎの一ひとである所ところの鏡かがみが祭まつつてある。此鏡このかがみは、昔むかし、天照アマテラスオホミカミ大神おほみかみの、之これを子孫しよんに傳つたへ給たまふ際さい、此鏡このかがみを見みること我われを見みるが如ごとくせよと仰おほせになつたときいて居ゐる。然しからば、私共わたくしどもは、國民こくみんとしては、是非ぜひとも、自己じこのすがたをその光ひかりによつて見みせて頂いたかねばならぬ。それと共にまたそのうちに親おやの神かみのおすがたをも拜はいせねばならぬ。是こゝに於おてか、自己じこをうつす鏡かがみには、また親おやの精神せいしんをも見みるべきである。

パンヤンの『天路歷程てんろりしやう』の旅人たびとは段々だんと旅たびをづいけたのである。

道德村ドウトクむらもすぎで、釋義家シヤクギキにも一泊いちぱくした。また美麗宮ピレイキウに宿やどり。死影谷シエイダニも難なくすぎて浮華市フクラシにては一たびは捕とらへられしも、幸さいに不可思議ふかしぎの力ちからによつてのがれることが出来できたのである。

その後ごのち、また懷疑城クワイギシヤウに幽囚いうしゆうの身みとなつたが、幸さいに約束やくそくの鍵かぎによつて、また此城このしろを出いで、可懷ナツカシの峰みねに達たつすることが出来できたのである。

可懐の峰は、能力と清浄と慈悲との三の峰から出来て居る。さうして、そこには、知識、経験、誠醒及び誠實の四人の善知識が居て、いろ／＼とその旅人は欺待をこれらの人々よりうけたのである。

あちらこちらの見物がすむと、その食堂が開かれた。食堂に入つて見るとそこに大なる鏡がかけてある。その前に立つて見るに、我すがたのあり／＼と見らるゝと共に、また未だ嘗て見たことのない親のすがたをもそのうちに見たとのことである。

私共は、わが行爲によつて初めて自己の眞實偽らざる姿を見ることが出来るのである。行によつて、自己の如何なるものなるかを観する時、私共は自己の無力であり、無智であり、罪惡のものであることに驚かすには居られぬのである。如來の不行は、その時、また我行鏡となつて我前にあらはれ下さるのである。私共はこの大行のうちに初めて眞實の自己を見、また同時に

眞實の親の如來をも見るのである。一には、決定して、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し、常に流轉して出離の縁あることなしと深信す。二には、決定して、かの阿彌陀佛四十八願を以て、衆生を攝取したまふこと疑ひなく慮りなく、彼の願力に乗ずれば、定めて往生を得と深信すとは、これ善導大師の自己の姿のみではない。そのまゝ、我偽らざる三世通貫の自己の姿である。

第一〇章 破壊

一夜、知らずく、讀書に夜を更かした。

俄かに、身に冷氣を覺えたから、火鉢の側によつて、火をさばいて見た。

宵には、澤山埋火をして置いたのであつたが、今やその種さへなくなつて居た。

火鉢のなかには、唯炭の死骸が白い灰となつて残つて居る。じつと、ながめて居ると、心の奥底から何ともいへない悲哀の潮が我胸を襲ふと共に、私は思はず、灰の運命を心のうちに跡づけて難有いと思ふたことである。

深山に生々と繁茂して居た木は、樵夫の爲めに斬り仆された。次に枝といはず、幹といはず、何れも皆な斬りきざまれて、炭焼によつて釜戸のなかに

投せられた、彼は茲にその生を破壊して、遂に色もなき黒炭となつたのである。その炭は、また火鉢のなかに投せられた、さうして點火された、炭となつた木は、そこにまた炭としての生命を永久に持続することは出来なかつた。今また火の爲めに破壊せられて遂に死骸の灰となつたのである。すべては何れも皆な創作の進化ともいへばいへやうが、進化が退化かは何れにもあれ、一切のものは、少くとも炭の運命の如く、破壊の連続とも持続とも名け得ることが出来やうと思ふ。

釋尊は、常に一切のものは、苦、空、無常、無我と仰せられた、要するに世に常住のものはないといふことである。所謂、破壊の持続にすぎぬといふことになる。破壊は人々の常に嫌ふ所であつて、何人も悲しく思ふのである。また、何人も之を苦しく感ずるのである。が、然し能く考へねばならぬことである。

思ふに、我々が悲しいとか、苦しいとかいふのは、畢竟何故であらうか、夜更けて俄かに寒くなつたのは、我寒さに堪ゆる體温の力が不足であるからである。悲しいといふのも、苦しいといふのも、一口にいへば、力が足らぬ或は力がないといふことに結歸するやうに思ふ、然らば、力といふものは、如何なるものによりて生じ、如何にして與へらるゝのであらうか。

夜更くるまで、寒さを感じずに讀書することの出来たは全く室が温かつたからである。室の温かつたのは、火鉢に火があつたからであつて、讀書して居るその間は、知らずに居たものゝ、炭は火鉢のなかにあつて、靜かにその身を焼きつゝあつたのである。瓦斯が光力を放つて居る時は、一方には石炭が當にその身を焼いて居る。所謂石炭の上に破壊が行はれて居る。室内が温かであるその時は、即ち火鉢の炭が自からその身を焼き靜かに、自己を破壊して居る時である。常住のものは、決して力の源泉とはならぬ。すべての力

は、常に何等かの破壊の結果を意味して居る。米や肉や野菜やが、そのまゝに、常住の持續をついて居ては、我等の身體に生命の力を與へることは出来ぬ。各々それらが胃によつて破壊さるゝことによつて、我等は日々その生活續けることが出来る。然らば、すべての力、我等が不足を補ひ、我等をして生命あらしむるすべての力は、全く破壊の賜物である。夜更くるまで、寒さを感じずに、讀書をすることの出来たのは、全く炭そのものゝ破壊の賜物である。火が種もなくなつて初めて、火そのものゝ恩恵を知り、炭そのものゝ事實を明かにするのである。汝の爲めに、何時が何時までも生きながらへて居るといふことも尊く且つ難有いが、また汝の爲めに、とうの昔にお死になつたときと、また一層その死によつて、少なからぬ力を附與せらるゝものである。アルツイバアセフの『偶像』は、宗教に對して少なからぬ暗示を教へて居るやうに思ふ。

どこであるか分らぬが、大變淋しい深秘的の深林中に一人の大學生が起つて居る。多分、恐ろしき罪を犯してかゝる所に流されものになつたのである。あちら、こちらと、彷徨ふて居ると、偶然、とある土人の小屋の前に立つた小屋には老人の土人が淋しさうに蜜蜂を飼つて棲んで居る。常に老人の手に何かがある。見れば、極めて拙劣ではあるが彩られた偶像である。老人は讚歌でもあらうか。口の中で何か常に歌ふて居る。さうして、細い箸のやうなものに蜜をつけては偶像の唇に塗つて居る。それを見た青年大學生は、心のうちには嘲笑せざるを得なかつた、既に色にも見へたのか、老人は此無信の青年を小屋から逐ひ出さうとした。青年は、冷笑を浮べて、そのする所を見て居たのである。

老人は、すつと起ちあがつた。急に偶像をふりかざして呪文やうなものを唱へながら、その青年の方に向ふて來た、土人の老人にあつては、此青年が

若し偶像の前に拜跪せなかつたならば、立ちどころに神の威力によつて滅ぼされるであらうと考へて居たらしい。

その時、青年は、何を思ふたか、急に小銃をとつて狙ひを定めて、拙劣に色どられた偶像の額をめがけて、ズドンと一發放つたことである。彈丸は、偶像を破壊してしまつたのみならず、また老人の耳と頬の一部をも突き通うした。老人は、大變驚いた。さうして、大變狼狽したことである。

その後、程經てから、青年は再びその土人小屋の前に來た。已前來た時は、すべての光景は全く一變して居る。四圍は森として居る。老人も居らぬ荒々しく打壞された蜂の巢があちらこちらに、投げ倒されて居る。また、あちらこちらに押し潰された蜜蜂の死骸が横つて居る。僅かに生き残つて居る蜜蜂はまるで、氣拔したやうに自家の滅亡の跡を木の枝にとまつてながめて居た。青年を見るなり、青年めかけてその頭の上に飛びかゝつては來たも

の、その呻り聲も力なく、遂に主人の敵を眼前に見ながら何の報ゆることもしなかつた。偶像は、今もなほそのまゝ、あちらこちら破壊されてなげられてあつたが、その偶像の顔は、何の變りもなく無意味に笑ひを含んで居たこの捨てられた神を見た所の青年は、その時、何故か深く咎めるやうな氣がしたとのことである。

青年は、大變に慚愧に堪へない思ひが生じた、偶像を破壊したことが、如何にも悲しくなつた、此時、彼は今日まで未だ嘗て感じなかつた、慚愧と悲哀、寧ろそれ已上のもを體得したといふことである。

思ふに、その初め、青年には破壊せざりし偶像に對しては、何等の感ずることにはなかつた、一旦自から破壊して、今やその時まで供養して居たその人も居らず、戶外にすてられたその偶像の姿の痛ましきを見ては、自から深く悲哀を感ずると共に、また深く慚愧したことである。否な、それ已上のもの

を感じたのは、全くこれ破壊によりて與へられたる神の勝利である。遠くからながめて居る谷間の梅は手近く人々にかほることは出来ぬのである。「手折らるゝ袖にかほるや梅の花」といふことがある。救済の能力は、決して初めより常住の佛の賜物でなく、その昔、法藏菩薩としての、幾たびも幾たびも死しては生れ、生れては死して、我等が爲めに破壊の連続によりて生じたるものである。

ニーチエは、「神は、とうに死んだ」といふて居る。信相菩薩は、「佛は何故に死し給ひしか」と問ふて居る。「釋迦如來かくれましまして、二千餘年になり給ふ、正像の二時はおはりにき、如來の遺弟悲泣せよ」とは、これ實に我聖人の悲哀である。末法は無佛の世である、眞に我佛は、我等が無信の砲丸にお死になつたのである。否な、佛とは末法のみでなく、昔の昔から、我等の爲めに幾たびも幾たびも死んで下さつた方である。

我等が、今日までかゝる生を保つといふことが、實にこれ不思議ではないか。我が生の持續には、少なからぬ犠牲が拂はれて居る。そこに佛の方に死の持續がなければならぬ。

佛を尋ねて佛にあふ能はざる人は思はねばならぬ。佛は既にお死になつた人の爲めではない、我が爲めにお死になつたのである。我等が眞に我等が爲めの佛の死を感じる時に、初めてまた眞に我爲めの佛の生を感じる事が出来る。人々その信仰の徹底せぬのは、能く心底から佛の生をも感ずることが出来ず、また佛の死をも感ずることが出来ぬからである。

火鉢の火が消えて種さへなくなつた。その時、初めて愚かなる我等は、火の尊きことを明かに體得するのである。末法は、どこくまでも無佛の世である。釋迦如來のおかくれに泣いたその心が、そのまゝ、彌陀如來の今現在說法の教に接する心である。

上野の坂下を通ると死神に捕はれるといふ、既に死神といふことがあればまた死佛といふことがなければならぬ。然かも、その死は、常に佛にあつては我爲めの死である。否な私共は日々殺し、また殺さうとするのである。これによつて、眞に心底から湧き来る悲哀と慚愧とは、必ずまた生の佛を認め、その佛の救ひに與かる人である。人間は、親と一所に居ると、それほどに親のことは思はぬ、親と離れて居ると時々泌みくくと親のことが偲ばれる。然かも、若し先だたるゝならば、親を思ふ子の心のうちには、最も確實に親の力を感得するのである。

眞實の死は、常に眞實の生である。親の死骸や、或は兄弟の死骸に訣れる時、胸一杯に、生の親、或は生の兄弟に遇ふことである。

第一章 寶間比丘

釋尊の御在世に寶間比丘といふのがあつた。

佛所に參つて申しますには、既に私も具足戒を受けました。つきましては、これから専心修行を致したいと存じます。如何致したならば、よろしくありますかと。その時、比丘に對せられました、我大聖釋尊には、ただ一言、汝が物にあらずば取ること勿れ」と仰せられました。何か、まだそれ已上にお話があるであらうと思ふて居られたが、それ已上に釋尊は寶間比丘に對して何のお話もなかつたのであります。

「汝が物にあらずば取ること勿れ」。全體、これは、どういふ意味かしら。更に世尊に對して問ひ反へす事もせず、之を口のうちに繰りかへし乍ら、寶間

比丘は佛所を去つて樹下に至り石上に座具を布き、結跏趺坐してその御教訓を考へ始めました。

「汝が物にあらずば取ること勿れ」とは何の意ぞ。他人のものを取つてはならぬといふ事である。何なりとも他の方々のものを取つたならば盜賊であるつまり、これは、盜賊をしてはならぬといふことになる。ところが、自分はまた盜賊をした覚えもなければ、また今後如何程貧乏したとて、そんな、なさない心を起さうとも思はぬ。また、盜賊をしてはならぬ、他のものを取つてはならぬといふ位な教は、わざわざ、世尊の教をうけずとも、小供の時からきいて居る事である。今更に事新らしく聞くべき語でもなければ、また教へ下さるゝ事もあるまい。私が、どうか専心修行が致したいと願ふて、殊に釋尊が私の爲めに御示し下されし御教訓なれば、何か此外に、まだ深い御思召がなくてはならぬ。汝が物にあらずば取ること勿れ。どう考へて

見ても、他人のものは取つてはならぬといふ事より外に考へやうはない。が然し、何か、そこに深い意味があるに違ひない。「汝が物にあらずば取ること勿れ」。さうである。これを反對に考へて見ると、「我が物ならば、取るべし」との仰せとなる。さうであつたならば、他のものは取つてはならぬ。我が物は取つてもよいとの事である。然らば、我は今遠い他の物を考へるよりは、手近い我が物に就て考へて見やう。今日、我にありて、正さしく我物といふものは何であらうか。そこで、寶間比丘は、こゝに「我が物といふ、畢竟何ものぞ」といふ問題を考へ始めたのであります。

私には、家もあり、財もある。地所もある、また祿位官爵もあつた。然し今は具足戒をうけたる出家の身の上である。既に出家し終れば、是等のものは一として我物でなく他のものである。然らば、家宅財寶、祿位官爵は今日我が取つてならぬものである。

次に、我が妻子眷屬である。これとても出家し終れば、我がものでなく他のものである。然らば、妻子眷屬は今日我が取つてならぬものである。

次に、我がこの五尺餘の身體、頭目手足等である。是れは我物なるべきか他のものは、いざ知らず、少くとも、これだけは誰でも自分の物だと思つて居る。が、能く考へて見ると、どうやら、これも我が物ではなさうである。畢竟すれば、五蘊假和合の頑肉、親あつて我あり、何れも皆な父母肉血の餘分ではないか。生れて已來、衣服、飲食、臥具湯藥を以て養ひ來りし物であつた、眞實我が物ではない。内に肉眼あり、外に色あり、中間に虚空あり、光明あり。衆縁和合して假に色相生するのである。内に耳根あり外に聲あり、遠からず近からず、他に障碍なき時、衆縁和合して假りに聲相生ず。色といひ、聲といひ、之を求むるに、一として實體なく、また眞實我物でない。乃至、何人も意に常に善惡邪正是非得失を分別する。これ實に我が物な

るか、畢竟すれば、これもまた、見聞覺知の影である。之を求むるに、一として實體あるものはない。能く考察せば、今その之を求むる我心すら、之を求むるにまたこれ空不可得ではないか。

「汝が物にあらずは取ること勿れ」。あゝ、世間には、一として我が物といふものはなかつた。夢の一時に覺めたるが如く、寶間比丘は、この時一切の我相を離れ、廓然として初果に入り、再び思惟して羅漢果を成じたとある。尊い話ではないか。

「汝が物にあらずは取ること勿れ」。寶間比丘は、先づ我物ありやと尋ねて彼は世に一物の我物のないのみならず、我もまた我物でないことを知つたのである。他の物を取るならば、之を偷盜と名くるのである。これは佛の誡め給ふ所のみならず、また深く法律の禁する所である。然らば、我等は、與へらるるに満足せねばならぬ。物は一物として我物にあらずとは、これ實にわ

が報恩主義の第一原理である。

物は一物として我物にあらずば、畢竟誰の物であらうか、世間には、物の私有を許さずして、反て共有を許すの主義がある。既に、物は一物として私有でない已上は、如何でか、また共有と見ることが出來やうぞ。果して然らば、一切のものは、私有でもなければ、また共有でもない。これ全く他の物でなければならぬ。他とは、何であるか。絶待である。如來である。汝の家宅財寶乃至我身體も、皆な是れ我物ではない。何れも皆な如來の物である。因て、一切のものは、皆なこれ我等が如來より、或はまた先祖より、他人よりの預り物なることを忘れてはならぬ。

萬物は預り物である。汝、地位を得るならば、こは如來より與へられたる預りたりと思へ。之を失ふた時は、如來に返へしたりと念すべきである。然らば、その地位にある間は、唯わが如來の地位を汚すことのない様にのみ心

懸けねばならぬ。その他、財寶とても、家庭とても、或は妻子とてもさうである。何れも皆な、他よりの預り物である、委託物である。他より預りたる金子を私の娛樂等の爲めに費せば、その人は委託金消費の罪を犯すのである。その罪は、極めて重いことである。果して然らば、如來の物は、唯如來の爲めに費すやうに心がけねばならぬ。些かにても、他のものを我爲めに費してはならぬ。蓮如上人は、擔端に落ちたる紙片を拾ひて、佛物よとお頂きになつたといふことである。

「今斯三界、皆是我有。其中衆生。悉吾子也」とは、『華嚴經』の御語である。家庭も親の家庭である。地位も親の地位である。それを我物の如く思ふて、我娛樂の用に供せんとするのは、親の所有金を盗み出して我娛樂の爲めに消費すると同じく、これ全く盜人の仕業である。「盜人を捕へて見れば我子かな」といふことがある。お互に、之を忘れてはならぬ。

然し、難有いのは、慈悲の如來である。慈悲ある我如來の親は、その子の不孝を咎め給はざるのみならず。反て永劫に積みかさね給ひたる法藏を開いて功德の寶を施し給ふのである。『法華經』「信解品」には、かやうにいふてある。「此實我子、我實其父。今我所有、一切財物、皆是子有。先所出内、是子所レ知。是時窮子、聞ニ父此言、即大歡喜、得ニ未曾有。而作是念、我本無三心、所レ有希求、今此寶藏、自然而至」と。窮子が、長くこれ長者の有である。預かつたものである、この故に一文とても「取ること勿れ」と取扱ふて居た所の財寶は、不思議や永久他のものではなかつたのである。造無一善の私共が、忽ちにして萬善萬行の總體たる南無阿彌陀佛の主となることが出来来る。

眞に一切のものは他の物也と知られた人は、またこれ一切の物は我物となつた人である。

第二章 存在

もの、存在するものは、畢竟、自は自の爲めに存在するものであるか。他の爲めに存在するものであらうか。若し、凡て世間に存在するものは、一として意義なきものなしとせば、お互に、何とか存在の意味を考ふべきものである。否な、存在といふことには、既に何等かの意義を豫想して居るから、私共は、常にその意義を明にして置く必要がある。

書齋には、書物がある、机がある、硯がある、墨がある、筆がある、火鉢がある、火箸がある、座蒲團がある。その他種々さまざまのものがあ。かく、さまざまのもの、あるのは、何の爲めにあるのであらうか。書物のあるのは、書物の爲めに書物があるのではない。書物は人の讀む爲めに、書物は

書齋にあるのである。机があるのも、さうである。何も机は机の爲めにあるのではない。書物からいへば、書物をのせて置く爲めにあるのである。硯がらひへば、硯を置く爲めにあるのである。何う考へても、書物は書物の爲めにあるのでなく、机は机の爲めにあるのでない。それでも、註釋書や字引のやうな書物は、書物の爲めに、書物があるのではないかといふ人があらうが、それはかまはぬのである。私が今書物は書物の爲めにはないといふのは、嚴格にいへば、その書物はその書物の爲めにあるのでないといふのであるから、決してさしつかへはない。つまり、註釋書は、註釋書そのもの、爲めになく、字引は字引そのもの、爲めにはないといふことである。それと同じく、硯のあるのも、硯は硯の爲めにあるのでない。筆もさうである。火鉢もさうである、火箸もさうである。椅子や座蒲團が書齋にあることは、主人が之にかゝるとか、或は客人があつたら之を敷いて頂くとか、所謂そのもの已外にそのもの

存在の理由はあるのである。これは、單に書齋にあるものばかりでない、勝手にあるものもさうである。膳であれ、碗であれ、コップであれ、鍋であれ、釜であれ、何れも皆なそれ自身已外に存在の意義を有して居る。膳碗は膳碗それ自身の爲めに働いて居らぬ、コップは、自分の爲めに、些かも存在の理由を認めて居らぬから、時々破壊せられても腹を立てぬ。若し一、鍋釜にして、自分は、些かでも自分の爲めに存在するといふ考があつたなら、日に三度が三度、どうしてか人の爲めに熱火の苦痛を忍ぶことが出来やうぞ。勝手道具が折々破壊せられても腹をも立てず、時々、下女よりして、奥さんからの怒りを移されても、平然として居る事の、出来るのは、つまり、全然それ自身の存在は、それ自身已外に存在の意義を認めて居るからである。それ自身のあるのは、それ自身の爲めにあるのでないからであります。更に進んで、勝手全體からいふてもさうである。勝手は決して勝手自身の爲めに

出来て居らぬ、書齋は決して書齋自身の爲めに作られて居らぬのである。家屋全體からいふてもさうである、庭園全體からいふてもさうである。その他、山であれ、河であれ、人事界といはず、自然界といはず、天地萬有、どれ一つとり出して考へて見ても、そのもの、存在は、常にそのもの、爲めの存在にあらずして、必ず、他のもの、爲めの存在である。見よ、天地の大を以てして、尙ほ天は自から天を覆はず、地は自から地を載せず、天は地を覆ふが爲めに存し、地は人を載するが爲めに在るではない乎。然り、小は、書齋にある一巻の書物より、大は天地に至るまで、一切萬有、何一つ、それ自身の爲めに、それ自身存在するものはない、否な、天地は、如何なるものに對しても、それ自身の爲めに、それ自身存在することを許さぬものである。吾人は、これによつて、自は他の爲めに存在するといふ、存在に關する第一原理をうるのである。然らば、自己の存在を欲して、自利を計るものは反

てこれ自己の存在を危うするものである。そこで、これよりして、吾人は、利他の大行のみが、獨り、吾人が永遠に存在する唯一無二の大法であることを信するものである。

ところで、實際、吾人は、一も二もなく、自己といふ考を離れて、これも人の爲め、あれも他の爲めと思ふて、萬事やつて行く事が出来るかといふに、なかく、一通りや二通りの修養では出来ぬ。況んや、これも、あれも位でなく、自は他の爲めにあるといふ、所謂萬事に對して純然たる犠牲的精神の自覺は、三通りや四通りの修養では六ヶ敷い、そこで、吾人は、實行上からは、更にもう一度、存在に關して已前の事實を再考する必要がある。

我書齋には、何の爲めに書物があり、何の爲めに机があるか。書物は、我書物である。机は我机である。何せあるかといへば、いふまでもなく、我爲めにあるからである。机の上には、硯があり墨があり、筆があり、また種々

さまざまのものがあつた。これらのものも、畢竟、何の爲めにあるかといへば、要するに、我讀み書きする爲めといふより外はない。なる程、客の爲めに供へつけられたる、椅子や座蒲團は、客の爲めにあるに違ひない。然し、主人があるから客があるのである。已上は、客の爲めにある座蒲團も、また主人の爲めにあるといふことが出来る。そこで、書齋のうちに一々のものは愚か、書齋全體が、我爲めにあるのである。この考は、どこまでも、擴張する事が出来る。家屋も、我が居る已上は、我爲めにあるのである。庭園も、我之をながめ、之を樂んで居る已上は、我爲めにあるのである。吾人は、今こゝに原稿をしたゝめて居る。書く所の筆は、筆屋が造つたのである。筆屋、紙屋、筆紙があつたればこそ、吾人は今原稿を書く事が出来る。さうしたなら、筆屋や、紙屋は勿論の事、筆の穂を造る爲めには、兎が必要にして、兎も我爲めに山に居り山も我爲めに存するといふ事が出来る。ところが、眞の闇では、

原稿はかゝれぬ、吾人は光があつたればこそ、原稿をしたゝめる事が出来る。光の本源は、天にある太陽である。然らば、太陽も、我爲めに存し、天も我爲めに在るといふより外はない。従ふて、地もまた我爲めに在るのである、然らば、かく考へて見れば、小にしては我書齋にある一卷の書物より、大は天地に至るまで、一切萬有、何一つ、我爲めに存在せぬものはない。さうであつたならば、今、私が原稿をかきつゝある時からいへば、現に一切萬有は、我原稿をかく爲めに存在すといふべきである。否な、私は、確かにかくあると信ずるものである。換言せば、時からいふても、所からいふても、一切すべての事が、今現在、我なしつゝある事の爲めにあり、また、あつたのである、一切は、我存在の犠牲に供せられて居る。

吾人は、これによつて、他は自の爲めに存在するといふ、存在に關する第二原理をうるのである。吾人は、これよりして、最も確實に、親も、人も友達

も、山も河も、世界も淨土も、「三界は皆な悉く我有也」と仰せられたその釋尊も、法藏菩薩も彌陀の五劫思惟の本願も、いや「彌陀の五劫思惟の願をよくく案ずれば、ひとへに親鸞一人が爲め也」と教へ下されたその親鸞聖人までも、皆な悉く我爲めに存在する事を自覺するのである。孟子の「萬物皆備ニ於我」とは、この義である。

あゝ、宗教とは、自覺である。自己の存在に就ての自覺は宗教の「アルハ」にして、また「オメガ」である。人々、若し、自は他の爲めに存在し、他は自の爲めに存在することを忘れずんば、人生、蓋し得る所少なからざるべしと思ふ。少くとも、常に明確に、存在の意義を味ふて居る時は、決して如何なることが起らうとも、泣いたり、苦んだりするやうなことはないのである。

第一三章 修 養

常に悪い事であり、つまらぬ事であるといふ事までは誰でも知つて居るが、何事につけても、時々他を怨んだり、不足に感じたり、腹を立てたり甚だしきは謗つたりなど致しますのは、それ／＼特殊の原因もありまじやうが、一口にいへば、想ふ通りでなかつた、所謂、豫想と、事實との衝突が、人生苦痛の根本原因であると、私は思ふ。

天下の名所である、舊跡である、絶景であるときいて出かけて行つて見ると、存外である、こんな所かと思ふ事が多い。また「名物にうまいものなし」といふが、果して、さうであるか、どうかは、一考すべき事であると思ふ。すべて、豫想といふ事は、その特性として、何等の制限をも有せぬから、常

に誇大に失するものである。そこで、實際、事實に比較して見ると、どうしても事實の方が劣るものである。たとひ、絶景であつたに所が、豫想の絶景と比較して見ると存外だといふ感があり、また、豫想の味ひと比較して味ふから、名物も思ふた程うまくない事が多い。凡て、善いとか、悪いとか、美しいとか、醜いとか、うまいとか、まづいとかいふのは、一事實と一事實との比較か、若くは豫想との比較の上の話である。見ぬさきに絶景を豫想し、味はぬさきからうまいものと豫想し、實際の事實はどうしたとて、少しの制限をもうけざるそれらの豫想には、到底相應するものでないから、そこで、存外である、思ふた程でなかつたと思ふのである。今日は天気だと想ふて出かけても、途中俄かに雨がふることがある。橋があると想ふて来た河に橋のない事がある、すべて、自然界の事に就ては、その事實が、我豫想と外れた所が、先づお互に、存外であつた、思つた通りでなかつた位ですむが、人事

界の事になると、どうもそれだけではすまぬ。

どんな人でも、時々煩悶苦痛に陥る。さういふ時は、お互に能く内観反省して、先づその根本原因を考察すべきである。なぜ、そんなに苦むのであるか。悩むのであるか、かくも、身に不足を感じたり、腹を立てたり、人を怨んだり、甚だしきは謗つたりするのは、何せであるか。これには、家庭が自分を好遇せぬからといふ人もあらう。或は又、社會が自分を相當に取扱はぬからといふ者もあらう。或は又、最少し、彼はどうかしてくれさうなものであるのにしてくれぬと怨む方もあらう。或は又、こんなつもりではなかつた、こんな約束ではなかつた、かくあるべきであるのに、かくしてくれぬなと、多く世を怨んだり、人を謗つたりするが世の常である。然し私共は、よくその愚癡の根本原因を探らねばならぬ。若しその原因が他にあつたならば、そりや不足もいふべし、人も怨むべし。然れども、よく内観反

省すると、不満、不平、怨恨、嫉妬等の根本原因は、遠く他にあらずして近く我が内にある、私共は、自然界の事實に對して種々勝手な豫想を企つよりも、何事によらず、層一層、人事界の事實に對しては、誇大な、然かも自分の勝手極まる豫想を組立てるものである。單に之を組立てるのみならば、まだよけれども、或は意識的に、或は無意識的に之を固守して、それを以て、各自思ひくすべての事實を判断するからたまつたものでない。凡て、小言の土臺は誇大なる自己の豫想である、自分勝手氣儘な豫想が人生痛苦の根本原因である。

嬉しかつた、面白かつた、安心とか、満足とかいふ感じは事實が我が望まじき豫想よりも大であつた時に起る。つまりぬとか、不愉快とか、不安とか、不足とかの感じは、反對に小であつた時に生ずるものである。凡て、人間に常に不足不満の念の絶えざるのは、豫想の特性は、常に誇大で、常に自分勝

手なものであるからである。各自萬事に對する豫想が、大抵百般の事實よりも常に大なるからである。家庭の折合が悪い。親戚であり乍らにらみ合ひである。人を怨む、他を不足に思ふ。遂に亢じては、互に泣いたり、叫んだり、種々家庭及び社會の上に悲惨の事の起るは、畢竟すれば皆なこれ各自の豫想と事實との衝突が根本原因である。人と人との衝突、人と人との不和の前には必ず先づ各自に、己が胸の中の豫想と事實との衝突があり、不和がある。つまり、折合ひが悪いとか、不足だとか、不平だとか、不満だとか、人と人との衝突はこの各自の豫想と事實との衝突の影にすぎない。人と人との不調和の根本原因は我が胸の中の豫想と事實との不調和にすぎぬのである。嫁を貰ふ、これが親の氣に入らぬ。子に養はる、どうも家庭が思はしくない。初めのうちは互に遠慮もある、少しは辛棒もする。けれども長くはつかぬ。そこで互に愚痴をこぼす。不足をいふ、不平を訴ふ。怨む。謗る等の生じ來

るのは、畢竟その本は、氣に入らぬ、思ふた程にない、思はしくないといふ所に結歸する。所謂、その氣に入らぬとは、何であるか、自分勝手に完全なる豫想を組み立て、それを以て事實を判断せやうとするからである。思ふ程でなかつた、また思はしくないといふのも、またさうである。その時、人々は、各々自分の豫想を撤回し、又は精練し、若しくは間違うて居た所の豫想を訂正する事をなさずして、反て互に事實をして各自我豫想通りに致さうとするのである。これが、そもぐの間違ひで、人生痛苦の根本原因である。事實は事實にして、なかく自由に動かすべきものでない。よし、多くの事實中には、多少動かす事の出來得る事實ありとするも、事實は、多く外物他物にして他に屬し、若しくは自他に屬して居るものであるから、到底自分一人にては如何ともすべきものでない。この時、唯自己にのみ屬し、撤回しやうが訂正しやうが、自分が自分に如何様とする事の出來るのは、唯事實に

對する自己が今日までの豫想である。人は常に「人生不如意」と歎ずる、「不如意」とは、つまり、事實が自己の豫想通りでないといふ事である。他、または自他に屬し、自分のみにては、到底如何ともすべからざる事實を如何がせやうとするから、「不如意」である。若し自己にのみ屬する豫想を撤回し、若しくは之を訂正する時は、確かに我煩悶苦痛の境界を脱却して自由妙樂の天地に入る事が出来る。

すべて、結果に多少の變更を加へやうと思へば原因に多少の變更を要する。結論を訂正しやうと思ふならば、先づ前提の訂正を要するものである、いふ事でも、思ふ事でも、大抵皆なそれ／＼條理が立ち、双方理屈はある。然かも、その結果の正反對で、その結論の一致せぬのは、何故であらうか。推理の上には、何等の誤謬も過失もなく、双方相容れぬのは、つまりその第一原因を異にしその前提を異にするからである。結果と結論とは事實である。

原因と前提とは豫想である。自分が勝手次第に豫想を組み立て置いて、事實が豫想通りに出来ぬ時、その事實に對して不足を感じ、また小言をいふのは無理である。人に物をたのんで、人が應じてくれぬ時は、お互に不足に思ひ、また不親切な人だといふ。思ふたり、いふ位な事でなく、都合によると、怨んだり謗つたりするが、たのまれし人こそ迷惑至極で、人は決して不親切でなければ、また他に不足はない。況んや、怨んだり謗つたりするに於てをやである。そも／＼の間違ひは、たのんだら應じてくれるといふ自己の不明にある。不明は無明である。無明は、迷ひの根本である。間違ひは、自分が自分に勝手次第に造つた豫想に歸因する、ああもしてくれぬ、かうもしてくれぬ。あの人はかうであるのに、我はかうである。その他、何につけ彼につけ、愚痴や小言で日を暮し、徒らに煩悶苦痛の生涯を送るのは皆な悉く自分勝手な豫想を組み立て、それを土臺とし、それを尺度として事實を判断するか

らである。家庭に不和のあるのも、社會に不平を懐くのも、實に自分／＼都合のよい自己の豫想を固守し、之を徹回しまたは之を訂正せぬからである。かく申しますと、多くの人の中には、すべての豫想のうちには、そりや自分勝手なものもあらうが、充分自他相互の約束もあるといふ方もあらう。成程、先方が約束を履行せぬのならば不都合には違ひないが、約束はまたこれ一種の豫想であつて決して事實ではない。たとひ、相互にどんな約束があつたにしろ、約束が既に一種の豫想である已上は、豫想の間違ひのは當前であつて、間違ひはぬと固守する我豫想こそ、すべての間違ひの根本である。況んや、先方でも既に約束する時には、必ず履行しやうと思ふたに違ひない。然らば、たとひ、履行せぬとて之を責めるは間違ひである。約束は永久之を約束とし、豫想は常に之を豫想として置くべきである。若し、豫想は豫想、事實は事實としてかたづけけて置く時は、決して不満の不平の起るべきでない。

この故に、私は必ずしも、凡ての豫想を捨てよとはいはぬ。豫想は本來唯自己にのみ屬するものなれば、如何様とも自分に都合のよき、自分勝手な豫想を組立て、居るもよい。が、唯之を他に屬し、また少くとも自他の上に屬する事實の上に求めんとするのは、既に豫想の性質範圍を破るものであるから、充分謹まねばならぬといふのである。この故に、若し之を事實の上に求め、豫想と事實と衝突する事ならば事實を破壊し、事實を訂正せんとするよりも、先づ我豫想を徹回し、若しくは、訂正せよといふのである。修養とは、誇大な豫想の訂正である。勝手な豫想の精練である。自分勝手な豫想を徹回しまた修正し、精製し、終にはすべてに對する豫想は愚乎、豫想する主體即ち自己の豫想まで斷滅する人こそ、眞にこれ修養の極に達したる人である。所謂、佛教では、之を稱して無我の人といひ、その境界を最上安穩の境と名くるのであります。

ところが、何と申した所が、私共は凡夫である。自分勝手なものである。自分と自分に、誇大な然かも自分勝手な豫想を浮べては、之を事實の上に求め、意識的に或は無意識的にそれに支配せられては、日夜煩悶苦痛を重ねて居るのである。よし悪ひと思ひ乍らも、我力では凡ての間違つた豫想は之を断滅するは愚乎、之を訂正する事も出来ぬ。我力にては、どうしても無我の人となる事は出来ぬ。が、幸には、私共、如来の親の御慈悲を感じてより已來、如来の御光明によつて正しからざる幾多の豫想は日に日に訂正せられ、今日は此世の事は愚乎、未來の事に關してさへ、我親鸞聖人と同じくうたとひ地獄におちたれども、更に後悔すべからず候」と、所謂豫想なきまでに我如来がたのまれ、日夜、自然法爾の日暮の出来るやうになつたのは、あゝ思へば、我は何たる幸福な身であらうか。これ偏へに我力にあらず、全く他力回向の御力の然らしむる所である。

第一四章 概念佛

一 個性に就て

昔、まだ我聖人が吉水の御禪房にあらせられた時のことである。一日、御友達同志のうちに、いろ／＼と信仰上の談合中、信仰は、一なるものか異なるものかといふ話に就て、何時になく話に花が咲いたのである。聖信房、勢觀房、念佛房等の人は、何れも皆な、信仰は個人的のものであるから別々であるといふた。之れに對して、我聖人は、絶待性のものであるから同一である。もと／＼絶對といふものに二あるべき筈なく、我々同志の信心の一なるのみならず、御師匠法然上人の御信心も他力である、我信心も他力である、等しくしてかはることなしと仰せになつたことである。

そのうちに、御師匠法然上人も、またその談合中に加はらせられた。さうして、次の如く、此信仰一異の問題は解決せられたのである。云く「たゞ一也、我がかしくて信ずるにあらず、信心のかはりあふておはしまさん人々は、わがまいらん浄土へは、よもまいりたまはじ。よくくこゝろえらるべき事なりと云云。」

實に、問題は、明確に解決せられたものである。誠にその間に一點の疑議を加ふべき餘地はない。これによつて、他力の信仰の、萬人同一であることは、永久の事實であつて、何人も、今日またかく翫味し居ることである。ところで、お互に茲にこの問題に關係して考へねばならぬ事が、唯一つ残つて居ると思ふのである。それは、信仰と個性といふことである。

すべて、ものには、如何なるものにも各々個性がある。個性があるから、すべてのものは、個々別々に存在し、また存在する所の理由もあるのである。

筆、墨、本、椅子、火鉢、坐蒲團等には、それ／＼そのもの／＼にそれだけの個性があつて、そのすがたを持し、その用をなして居る。また同一筆のうちでも、水筆とか、真書とか、万年筆とか、それ／＼自己の個性を有して居るのである。そこで、それ／＼そのものにも存在の理由がある。もし、凡てそれ／＼のものに個性がなくなり、またなくしてしまふたならば、一切のもの、唯一つとなつてしまふ筈である。従うて、一つあれば、萬事足るから、他の必要をも否認することゝなるのである。

かういふことは、平生意識的には考へては居らぬにもせよ、多少誰でも、此事實のもとに生活して居る。所謂、お互に、多少此經驗を持つて居る。一人で私が勉強して居る時には、一の火鉢で充分である、一の椅子で結構である。それ已上は、不必要であり、また室の邪魔になる位なものである。ランブとてもさうである。ところが、此ランブである。婆やは、都合によると、

勝手用のものとり違へて書齋に置いて行くことがある。たとへ、とり違へて行つても、それがランプであるならば、私の勉強には充分である。が、それが、ランプでなく、炭取ととり違へてあつたら困る。炭取は、ランプの代りにはならぬ。ランプならば、どのランプでも、餘程神性質のものでない限りは、互に誰れのとでも代用し合ふことが出来る。即ち書生のつけて居るランプだからといふて、その家の主人が書翰をその燈下で書けぬといふことはない。椅子でも、筆でも、病的な人でない已上は、またさうである。大抵、同一種類のものなれば、とりかへることが出来る。それが、はや衣服となり。また寢床となると平氣に他人のと自分のとをとりかへることは、少々六ヶ敷くなる。そこで、人間となると、いよいよ以てさうである。人間には、代人とか代筆人とか或は又代理人といふこともないではないが、實際、代りとか、とりかへて間に合はずとかいふことは、どうしても出来ぬこととなる。

世間を見れば、誰でも自分の親よりも、また自分の兄弟よりも、或は又自分の妻子よりも随分それ／＼立派な方もある。が、然し、自分の親即ち我をうみ、我をそだて、くれた自分の親は、子となつては、どんな他に立派な親があつても、とりかへることは出来ぬ。兄弟、妻子とてもさうである。如何に、我子は見悪くても、見悪くければ見悪くい程、親の身には、他人の子ととりかへることは出来ぬ。ランプは、他人のとも、とりかへ、また一時代用とすることが出来るが、人となつては決して、それは出来ぬ。何せであらうか。個性の發達を認むるからである、所謂、そこには、常にとりかへることの出来ぬ人格が動いて居るからである。單に人間を物質と見るものでも、人間をランプと同様には、恐くは考へることは出来ぬであらう。出来ぬのは、事實さうでないからである。すべてのものには、それぞれ個性がある、殊に人格となつては、とりかへたり、代りとして考へることは出来ぬ。私は數年

前、一人の子供を失ふた。それが爲めに、時々今尚ほ子供の話をするのである。すると、子供のない人より、あなたは、今日ではお子供衆も家に出てあるではないかといふのをきくことがある。成程家には既に子供は出来て居る。が、私には、死んだ子供は永久失はれて、今の子供、否な今後幾人の子供があつても、私には、死んだ子供の代りとしてそれを考へることは出来ぬものである。

そこで、私は、法然、親鸞兩聖人は勿論、蓮如上人等を始めとして、一切の人に對して、また同一考を持つて居るものである。私が、法然親鸞兩聖人を尊重崇拜するのは、唯偉人とか、或は又鎌倉時代の宗教革命者とかいふやうなことではない。同一信仰の御方である。私共に他力の信心を教へて下された御方としていある。同一信心であり、同一のことを私共に教へて下された人ならば、兩聖人を取り代へて考へてもさしつかへないやうである

が、私にはさういふことは出来ぬ。同一信仰の人でもさうである。況んや、大日と彌陀、彌陀と耶蘇をやである。法然聖人は、やはり法然聖人である、親鸞聖人はやはり親鸞聖人である。我親は我親であつて、他人の神は、決して我佛ではない。そこで、單に信心といへば、法然聖人も、我聖人も、或は又聖覺法印も、信空上人も、熊谷蓮生房も同じである。皆なこれ如來より賜はらせ給ふ所の信心であつて、その間毫末の相違のあらう筈はないのである。若し、さうでなかつたならば、同胞ではなくまた同じ淨土に參ることは出来ぬのである。さうであるのにもかゝはらず、我等は彼等の人々を取り代へることの出来ぬのは、そこにそれぞれ各自動かすべからざる個性を具して居るゝことを認むるからである。

御慈悲は、その機そのまゝの所に頂くものである、他力の信仰は、個性の破滅ではない、従うてまた他の人格の授受でもないのである。況んや、人格

の摸擬なぞであるべき筈はない。佛はこの機をとり代へて來れとは仰せられぬ。信心は、個性そのまゝの上に頂く所のものである。うるほふ草木、おのがまに／＼である。

二 適用に就て

春になると、小供の時には、能く野山に出で、遊んだものである。小供の時には、天地自然は頭のうちにあらずして、自己が天地自然のうちにあるのである。そこで、小供の時には別にこれといふ疑ひもなく、また心配もなく、花を摘み、鳥を逐ふたりして遊び暮すのである。が、小供心にも、單に花を見、鳥を見て遊んで居ることが出來ず、之を摘み、之を逐ふたりするその所に、天地自然は早や既に人間の頭のうちに入り初むる準備をなすのである。段々生長するに従うて、此天地自然は、各自い

ろいろの形式や分類や着色やは違ひまじやうが、何れも皆な各自の頭のうちに之を見るやうになつてしまふ。所謂、頭のうちに天地自然がはいつてしまふのである。近くは、眼を開いて居ると、世界のなかに自己があることが知らるゝと共に、眼を閉ぢて見ると、誰でも能く世界は我うちにあることを経験することが出來る。

すると、ものを知るといふことは、ものが、その人の心のうちにはいつたことであるといふことが出來やう。そこで、知識とか經驗とかいふことは、つまり、外にあるものを我心のうちにとり入るゝことを教ゆるものである。ところが、此外界は、廣大無邊のものであるから、なか／＼そのまゝにて之をうちにとり入るゝことは出來ぬ。そこで、とり入るゝ爲めに、全體のものを部分的に考へてとり入るゝことをつとむるのは止むを得ないのである。時といふことは、もとより不分割性のものである、昨日とか明日とか今日

とかと分割することの出来るものでないが、やはり、さういふやうに分割して考へねば、どうしても、我心のうちに之をとり入れて考へることは出来ぬ。また空間に就ても、同一のことである。その他、如何なるものも、全體であつてその實不分割性のものであるが、之を分割して始めて我知識となり、またその知識によつて、それ／＼そのものに就ての概念も出来、また法則をも見出すことが出来るのである。之が出来、之を見出すと、それを直ちに凡ての事實の上に適用して、凡てのものを考へ、凡ての事を處理するものである。先きには、何氣もなく、往返の途すがら、春光を帯びつゝ、路傍の草花を摘みた小學生も、中學生となると、路傍に花でも咲いて居ると、此花は何種に屬するとか、此植物は何科であるとかいふやうになる。かくなるのは、既に中學生になると、教師から植物學を習ふて、植物に關する凡ての概念が頭のうちに出来て居るからである。植物を見ると、すぐに頭のうちにあるその概

念中の何れかを、そのもの／＼上に適用して考へるからである。子供の時には單に奇麗だと、山のこなたに見た所のその虹も、中學生となると、光線の原理をあてはめて之を考へることとなるのである。その他、數に關するすべての事象は之を數學の公理や定理にあてはめ、動物に關するものを見れば、教へて貰ふた動物學の知識を適用して、それに關するすべての事實を判斷するやうになる。

そこで、自然界といはず、人事界といはず、すべての出来事は、科學者は科學の上より、哲學者は哲學の上より、法律家は法律の上より、各々その經驗と推理等によつて知られたるその原理、その分類等を各自に適用して以てすべての事實を解釋し、また一切の出来事を見るのである。私は、この見方を常に適用解釋と名けて居る。げに、この適用といふことは、人々の常に有する所の性情であつて、此事は、また常に我信仰界にも行はれつゝあるので

ある。

お互に、種々の出来事に出遇ふ。その時、因果の概念を頭に持つて居る人は、すぐと、それを概念化して何事も因果の然らしむる所といふのである。これは、そのいふことの上には、決して間違ひはないのである。また、業感といふことを常に考へて居る人は、業感の然らしむる所といひ、眞如縁起では、眞如所生といひ、六大縁起では、六大所造といふのである。即ち、自己が教へられたり、また常に豫め有して居るその概念のうちに見聞し生起する所の事實をあてはめ、その教を適用して以て當面の出来事を見るのである。ところで、これ以て、眞實の信仰が成立するかといふに、説明は出来ても、それではまだ、眞實の安心は出来ぬ。凡ての出来事に對して、一つ一つ之を概念の型にあてはめ、一つ一つ我理性の力によつて事實をそのうちに盛らねばならぬのである。そこで、聖道諸宗の教では、之を容易にする爲めに修

行といふことが必要となつて来る。概念をあてはめ、適用解釋式の人生觀等は、之を眞實の事實たらしむるには、常に修行を要するものである。到底、我等の企て及ぶべきものでない。が、やゝもすると、絶待他力教にても、お互に此概念をあてはめ、即ち適用解釋式の信仰に陥ることがある。さうなると、我他力教も、また、すべての事實を一つの定められたる型にあてはめることが、信仰であることとなつてしまふのである。何の生命もなく、それは唯一つの解釋にすぎぬこととなる。

こゝに、今學生の方が幾何の試験をうくることがあつたとする。その問題に對して之を解釋するには、並行線の定理にあてはめやうか、三角形のしやうかと、その何かをあてはめて解決するよりも、どれにしやうか、之にしやうかとその型を適用すると自から考へずして、すぐその答が出るならば、何よりもその方が自然であつて結構であることと思ふ。これ眞に義なきを義

とするものである。

他力の信仰は、すべての出来事に就て、我々にその因つて起る所以を知らしてくれるものである。然し乍ら、所謂、あてはめて考へる所の適用解釋法ではない、義なきを義とし、様なきを様とする上に顯はれ來る所の靈興である。他力の信仰も、あてはめ信仰となり、適用解釋式とならぬやうにありたいものである。信仰は適用でない。他力の信念は、佛は申すに及ばず、天地自然を頭のうちに入れるにあらずして、我は天地自然のうちにあることを常に教へて下さるのである。

三 概念に就て

どうも末代の不思議です、世間では、年一年と、我絶待他力教を信じ、また之を説く人々の多くなり行くは、誠に結構なことでありませす。此頃では、

學者といはず、俗人といはず、老人の方も、青年の方も、全く、門外の方々までが、信仰談と申せば、大抵、我他力教流の談でもちきつて居ります。宇宙に大なる力が存在するとか、その力は慈悲の塊であるとか、我々は有限であつて、我運命は全くその無限者の手によつて左右さるべきものであるとか、殆んど、我絶待他力教の光景を説かぬものは少ないやうであります。自から絶待他力教を信奉し、之を以て佛敎の極致、否な宗敎の極致とまで思うて居る私共にあつては、何だか「獨留此經」の金言も思ひ出されて、難有、またうれしい感じが致します。

ところで、難有く、うれしいと共に、私は、少し已前よりして、少々氣づかうてゐたことがありました。此頃に至つて今のうちに少々考へて頂きたいやうな感じがしてなりませぬから、こゝに少しく思ふ所を披瀝して見やうと存じます。

それは、外でもありません。先づ第一には、信仰の概念化的傾向であります。少しく、本でもよみ、また理性のまさつて居る人々は、なかく丸々大悲の親さまを信ずるといふことが六ヶ敷い。そこで誰でも一寸今日の頭で入り易いは、哲學などにて申す所の本體とか、無限とかいふ所の考であります。それまで参らぬものは、科學の所謂力とかいふ位の考であります。この事は一寸頭に入りやすいから、先づその本體とか、力とか、或はまた運命とかいふ一のものゝ存在を考へて、それに慈悲とか、智慧とかいふ一つの屬性をつけて、それで以て、盡十方無碍光如來とか、阿彌陀如來とかいふ方を頭のなかで造り出すことをつとめやうとする傾向はないかといふことです。かくして造り出されたる概念の如來。私は之を眞實の如來に對して概念の如來と名けやうと存じます。此頃に至つて、所謂、この概念の如來の爲めに苦み、また此概念の如來を逐うて居る傾向が自然生じては居らぬかと思ふこと

であります。また罪惡といふ事が、やはり、また概念的に傾いて、實感的であるべき筈の救濟といふことも、慈悲の如來といふ概念と、罪惡の凡夫といふ概念とを合して、救濟といふ概念を造り出すやうなことはないかといふこととであります。切角、月に日に盛んになりかけて居るその信仰談に、かくの如き批評を加へることは、自分の最も嫌ふ所でありますが、今では、その概念の取扱ひの爲めにこまつて居る方が澤山あるやうに見うけますから、私は今止むなくかくの如きことを申すのであります。概念の取扱ひだけでは、到底駄目です。概念は、たゞ骨格であつて生命のない所のものです。さうですから、概念からはどうした所が、眞實の生々したる救濟の如何なるものなるかを味ふことは出来ませぬ。信仰、殊に他力信仰は概念の取扱ひでなくて、眞實の如來に取扱はるゝのであります。自分も、随分考へて、いろ／＼と概念を土臺につみあげて、大悲の天に接するやうな氣持をもつた事もありまし

たが、それでは、駄目でした。眞實の如來と、概念の如來との差ですか。それは種々ありまじやうが、概念の如來の特性は固定的であります。我等が平生の心の上に没交渉であります。單に、宇宙の中心とか、力とかいふやうな宇宙論から出現したまひし如來では、到底我等が、今日現在、どうしやうか、かうしやうかと苦んで居るものを助て頂く事は出来ませぬ。私共の頭のなかにのみは、ありありとあははれて下さるか知らぬが、私共の心ありたけをひきうけて下さる方となつては頂かれませぬ。概念では、慈悲も、救済も何の價值もありませぬ。平生の日ぐらしの上及び我が今死んで行く時にそんなことをいふたり、考へたりして居ることも出来ねば、また出来た所が、そのものは、我生死の大事には没交渉です。何の益にも立つものではありませぬ。次に、第二には、この自然といふものゝうちに、いふにいはいはれぬ尊きあるものを認めることでもあります。自然そのものは、我に幸福を與へてくれると

か、萬物は我爲めに存在し私と宇宙とは一であるとか、そのものゝ上に如來のすがたを拜すとかいふことであります。これは、非常に麗しい考であり、決して彼是れと批評などすべきものでない邊もありすまが、若し他力信仰が單にさういふ所にのみお互の心がまだ遊んで居りますうちは、だいぶん餘裕がありはせぬかと存じます。私は、さういふ考へを遊んで居ると申します。然し、既に一度堂奥に達して、園林遊戯の遊びに出て居るならば、それは結構であります。若し、さうでなくして、唯さういふ自然といふやうな上のみ尊きいはれを感じて居るならば、それは他力教の趣味が分るといふのであつて、まだ如來の救済そのものに接するには、なかく遠いやうに存じます。文藝などの上にも、それ位なことは確かに感ぜられますやうに存じます。宗教殊に他力信仰の光景には、大にその風光もあります、それは信後の風光であつて、信仰の附録です。決して本紙ではありませぬ。

終りに、第三に、もう一つ申したいのは、我絶待他力教と個性といふことに就ての考です。總じて佛教では、無我と申しますのみでなく、我絶待他力教では、極力自力をすてることを説きます。そこで、此絶待他力教の信念が、此頃都合によると没我とか忘我とか無念とかいふ考へと同視せられて居らぬかといふことであります。即ち百川が大海に歸すると全くその諸相を滅するが如く、人々が大悲の願海に歸入すれば、全く如來の一に歸して自己のなくなるこのやうに考へることでもあります。私は、之に就ては、我信念の上には、反てその反對の感じを有して居りますから、従うて全く反對の意見を持つて居ります、絶待他力の信仰は、唯一の親に歸するの信仰であつて、至心信樂己れを忘れて無行不成の願海に歸することは確かである。所謂、大なる慈悲の海に我個性のとけ行くのであれば、即ち一になるといふやうにも思はれるが、私には、親と子、如來と我とをいふのには、一と申すよりは、

不二と申す力が最もよく我氣持に相應する語のやうに感ぜらるゝのであります。全體、萬物一とか、或は又一如とか、一實とかいふ所の一の思想ですな。あれは、全く聖道門自力の教義の根本思想のやうに、私は考へてゐます。我淨土門他力の教義は、寧ろ不二といふ所にすべて成立して居るやうに存じます。そこで、自力教の極致は、唯一であるが、他力教の方では、不二と申したらよからうと思ふ。即ち他力の信仰は、唯一の親に歸命するものでなくて、唯一の親に唯一の子が歸命するのであります。不二の玄門に入るのであります。いはゆる、親子一如は聖道自力の信仰でして、親子不二が淨土他力の信念と存じてゐます。一と不二とは、よく似ては居りますが、信念の上から申す時は大なる相違があるやうに存じます。従うて、私は他力の信念は、この不二の二を最も明白に教へて居るやうに存じます。さうですから、自力教は自己を觀じて自己を發見する教である。他力教は、自己を以て、親の如來に

一致するのであるなど、のみ思ふてゐたら、それこそ、切角な御慈悲も無くなるやうなことはないかと思ひます。私は常に思うてゐます。宗教は、如何なる宗教でも、皆なこれ自己を知ることである。さうですから、我他力教もまた自力教の自己発見の歴史であると共に自己発見の歴史であると存じます。唯、その間に如何なる相違があるかと申せばその発見の場所と、その発見の因縁等が違ふのみであつて、自力教も他力教も自己を見出し自己にあふといふことは同じことであると存じます。即ち、我他力教では、親の存在を本願の慈悲の鏡のうちに認めると共に、またそれ自身をもそのうちに認めさして頂くのであります。全體、如來の本願と申すもの、うちには、救ふ所の如來と救はるゝ所の衆生とが居るのであります。今、その居る所の衆生とは「十方衆生」とか「諸有衆生」とか記してあるもの、その實、誰の事でもない。是れ即ち自己のことでありませう。絶待他力の信仰は、自己を最も明確に本願

の慈悲の鏡のうちに見出した時に確立するのであります。個性がなくなるのでなくて、御慈悲の鏡によつて、個性が最も明かに罪惡の凡夫、必墮無間の徒ら者と見きはめついたのであります。彌陀の五劫思惟の願をよくよく案すれば、ひとへに親鸞一人が爲め也」とは、宗祖親鸞聖人が御慈悲のうちに、自己を發見なされた時の御満足であります。然かも、その自己は即ち本願の十方衆生、または諸有衆生であります。これを、文字通りに、三人稱や、復數の代名詞として見る間は、駄目であります。今此十方衆生、また諸有衆生が一人稱單數の我一人と映する時が、絶待他力信念の確立する時であります。そこで、絶待他力教の信仰は、この世にあつても、未來往生にあつても、如來と我とは一になるといふのでなくて、不二となるのであります。即ち、娑婆と淨土、生死と涅槃、煩惱と菩提、如來と我、親と子、彼と此とが一つになつてしまふのが聖道自力の教であつて、我淨土教は、その二を認めつゝ、

然かもその差別の二の、平等の一の御慈悲によつてつながれて居ることを認むるの教であります、我絶待他力教には、他の教の味ふことのない、難有いとか、尊いとかいふことがあります。若し、それらのものが、全然一なる時は決して難有いとか尊いとかいふ、所謂感謝の思ひの起らう道理はありませぬ。そこで、我他力信念と申すは、如來と我との間の差別即ち二の考を鈍らし、漸次にぼかして行くのではない。今日、我慈悲のうちにあるながら、自分には自分をも知らずにぼかしの日暮をしてゐた私が初めて御慈悲によつて自分をはつきりと親の前に見出したのが信念であつたのであります。所謂眞實の如來の智慧によつて眞實の自分が知られ、自分は親の膝に抱かれて居たことが知られた一念が二にして不二の思ひになられた所かと存じます。宗祖聖人の御消息等にも、至る所に「如來と等し」といふ御語がありますが、二ありてこそ「等し」の御語が味はるので、一であつたならば「等し」も何

もあつたものではありませぬ。本願の唯一の鏡の中には、最も明かに親の如來と子の我との二つがある。その二つが、御慈悲の鏡の一つで不二となつて居るので、如來と我とは、どこ〜までも別であつて不二であります。この世にあつては、勿論のこと、未來に於ても、またさうであります。私は決して百川の大海に歸入するが如く、すべてのものが、そのすがたを泯滅して眞如一實に歸するといふやうなことは、今日考へられませぬ。

第一五章 袋町

人生が常に眞實の都に入る十間道路であつてくるれば、誰しも苦みもすま
いが、實際はさうでない。お互に都合によると狭い小路にふみ込むので
ある。すると、どうしてよいやら、如何なる智者でも學者でも困らぬものは
少くない。たとひ、細くとも、まだその進むべき路の見出さるゝ間は、それ
ほどでもない。が、町には袋町といふのがある。つきあつて、もう進むべ
き路がない。人々、大なれ小なれ、人生の行路上、時々この經驗に際會する
ことと思ふ。

すべて、人間には、多小の差別こそあれ、如何なる人々でも、分別の力が
ある。三十、四十になつて心得違ひの事をする、世間では、分別盛りであ

るのにと評する。私は常に思ふて居る、人間は平生、どんなことに煩悶した
り、困つたりするかといふに、非常な大きなことよりも、實際はほんの一寸
としたことに困るものである。道のあるいて居て、山につきあつて倒れた
といふことはきかぬが、小石につまづいては時々倒れる。大海を渡りそな
うて溺れたことはきかぬが、小川にはまつて人は能く死ぬことである。勿論
世に生死の問題ほど大問題はない。一切の問題は何れもこのうちに攝するこ
とが出来ぬ。そこで、宗教とか信仰とか申すと、古の人も今の人もすぐこの
大問題を呈出する。さうして、大變大袈裟にこの問題の解決を促すのである。
が、能く之を實際問題として考へると、どうでしやうか、お互に時々悶々
の情に堪へないのは、例せば、死そのものでしやうか。最後の死のおそろし
く、また苦しいのは、それに違ひなからう。が實際問題となると、死そのも
のに至るまでの道程が最も苦しいことが多い。要するに、はつきりと生き、

れず、はつきりと死にきれず、心が、常にその間にたゞやうて落付かぬ時が人間の最も困る時である。

學生の方が病氣にかゝるとする。これ實に人生の袋町に出合ふたのである。愈々大病と診察されて、廢學に決定するまでが、なか／＼苦しい、既に廢學と確定して、専ら入院治療にかゝると、反て已前よりは種々な煩悶は少なくなる。二三日休んでは一日學校に出る、下宿にかへると大變熱が出て居る。そこで、自から檢熱器で熱を計つて見たり。脈搏を數へたりして居るその時が、人の最も苦しみ悶ゆる時である。それからまた、病氣も極悪いうちはそれほどでもないが、少々全快に向ひかけると、一方には學校のことが大變に苦になつて種々なことが氣にかゝるやうになる。さうすると、常に我々の苦しんだり、悶ゑたりする所は少くとも、死に至るまで、病に至るまで、老に至るまでが最も甚だしく感ぜらるゝ。俗に案じるより生むが易いといふ、こ

れもまた心配は生そのものよりも、生に至るまでが甚だしいといふことを示して居る。かう考へると、どうも、一切萬事は、至るまでのものである。

佛教では、人生を生老病死と分つて、之を殊に四苦とまで名けて居る。もとより、この四苦そのものも苦たることは勿論であるが、人々の多く苦しむ居るのは、正さしくそれに至るまでの所にある。

すべて、生あるものは、必ず死すといふのは、動かすべからざる眞理である、如何なる人も此眞理に對して一言半句も否や應はいへぬものである。思ふに、眞理といふものは、可除せらるべき整數のやうなものである。鋭利なる刃物であるから、之を以て向へば、人生はちやん／＼と割りきれて餘す所がない。ところが、實際となると、さう簡單に人生は割りきることは出來ぬ。人々雨天が二三日つくと、はや雨天で困るといふ。夏の暑く、冬の寒いのは、あたり前であるが、お互にすぐ、あついと、寒いかいふてこぼすの

である。某禪師に避暑の法を問ふたら、そりや、自分も夏になるばかりさといはれたときいた、おもしろいと思ふ。既に時候が夏になつて居ながら、自分が夏にならずに居るから暑いのである。病氣とてもさうじや、病氣にかゝつて居ながら、まだ心が健康のつもりで居るから苦しいのじや、自己の全體が病氣になつてしまへば、樂なものじや。げに一切がこの風にやつて行ければ、人生ほど、はつきりしたことはない。一切皆な、はつきりと割りきれてしまふ。心に何の残る所もない。

が、實際となると、どうもさう行かぬものである。一茶の句でありましたか、「露の世は露の世ながらさりながら」といふのがあつたやうに覺えて居る露の世は露の世也。生あれば死ありといふのは、眞理であつて人生は見事に割りきれる。會ふものは離るゝものである、得たものは、何時かは失ふものである。かういふことは、確かに眞理であり、事實であるが、實際になると

さうはつきりとは、なかく行けぬ。人生のことは、實際になると、露の世ながら「さりながら」の割りきれない風情の循環小數が附加して居る。どうして、自分のみはこう不幸であるか。どうして、自分だけは、こんなに病氣勝であらうか、どうして、我子は死んだであらうか。こんなことは、如何に思ふたとて、かへらぬことゝ知り乍ら、いざ實際となると、平生は大變はつきりとした人生觀を持つて居る人でも、割つても、割つても、割つても割りきれない循環小數の思ひが、我胸の底にのこるのである。人生のことは、如何なることでも、頭では割りきれぬが、胸では何時も割りきれぬ循環小數となつて顯はれて居る、若し胸で以て、人生が割りきれさへすれば、その人は正さに至る所まで至つた人である。西洋では、「バット(Butt)さりながら」は眞理のさまたげ」といふ語がある。眞に我胸には「さりながら」の循環小數は消ゆる時がない、人生苦惱の根源は正さに、この循環小數的の情念にある

のである。人生につきあたるといふのは、何につきあたるのでもない、げに此我小さき胸のうちの小数につきあたつて人は常に苦んで居るのである。そこに、哲學が整數的的人生の上になつたものとなれば、我宗教は、正さしくこの循環小數的的人生の上に成立つて居るといふことが出来る。そこで、宗教の必要は、正さしくその循環小數の凡情を我胸のうちから消却することにありことゝなる。若し、それが、どうしても出来ぬならば、何とかして、我等は人生上その循環小數を何等かの整數的數字にでもかきかへねばならぬ。小學校の先生は、學生に循環小數を分數にかきかへることを教へる。πの循環小數は、容易くπの分數とかきかへらるゝのである。我宗教も、また割りきれぬ人生をそのまゝ分數にかきかへることを教へる。人生は分子である、割りきれぬ循環小數の人生は、分母を示さるゝことによつて、茲にまた割りきれぬ人生はなくなつてしまふ。病氣にかゝる、あゝ、因縁じやとあ

きらめるのも、いはゞ一種の分母である。業報じやといふのも、いはゞ一種の分母である。然し乍ら、斯様な分母を附して居るうちは、まだ「至るまで」の眞實安心ではない。そのすがたの如く、宗教は分母を以て人生の分子の裏書をなすものである。その語の如く、我等は分子である、我等分子の存在は文母なくては存在せぬのである。我如來は、我等が永劫の分母にして我等は、常に母の如來に抱かれ、如來の手に捧げられて居るものである、分母が大きくなるだけ、それだけまた我分子は小となる。げに、人生の根底には、永久我等をすて給はぬ母の如來がましますのである。思ふに、眞に人生の袋町から人々を救ひ出すのは、唯この母覺のみである。

第一六章 二種生活

生活といふことは、生れるとすぐ始まつて居る。否な、母の胎内にある時より始まつて居る。が、然し、お互に正さしく生活といふ自覺のうちに自ら生活することは、誰でも生長してからのことである。

先づ、此世に生れて来た。どう思うて来たのであらうか、いくら考へて見てもお互に覺えて居ない。自から生れやうと思つて来たのであらうか。或は何等かのお計らひであつたのであらうか、或は又自然に生れて来たのであるかかういふことは、信仰を離れては、どうした所が考へることは出来ぬ。然し生長するに従つて、誰にでも明かになつて来る所の一事實がある。それは外ではない。智愚大小の如何にかゝはらず、誰しも生存したいといふことである。

る。能く考へて見ると凡ての事が生存といふことを目的として動いて居るやうである。さうして見ると、此生存の欲望、即ち我等は生るゝその時より意識するとせざるとに拘はらず、常に生存といふことを目的として居るのかも分らぬ。が、よし、さうであつたにせよ、或はまた何等かの目的をその他に有して居るにもせよ、實際の方面から考へて見ると、存外人間は何等かの目的のみを目安としては生活して居らぬ。その多くは、習慣的に趣味に生活して居るものである。

小兒は牛乳のみでぞだつ。されど、若し母がそれに砂糖を加へることを忘れて置くと、何にも知らぬ嬰兒でも乳首を吹き出してしまふ。未だ物心ない嬰兒も之によつて見ると大にその味ひに生長するものであることが分る。また、親が子供を育てるにしてもさうである。唯我子を斯様なものに育て上げたい、かういふものにしやうといふのみでは育つものでない。斯様なものに

しやうとか、或はまた、かうしたならば生長しやうかと、親は常に目的に考へては居らぬ。寧ろそんなことは、うち忘れて、唯何となしに可愛いのである。唯譯なしに可愛いといふその親の慈悲に子はそだつのである。今一小供の生長に就て考へても、かくの如く、親の方でも、子供の方でも、その生活の上には常に目的と、さうでない所のものが含有せられて居る。多少語弊があるかも知らぬが、私は之を趣味的とでも名けやうと思ふ。御馳走にあづかる。それが自分のすきなものであると、胃に少々悪いとは知り乍ら知らずくでなく、知つて遂頂きすぎるのである。かういふことを考へて見ると、自分は常に知る力は存外實行上には弱く、味ひの力の強いのに驚くのである。が、然し、人間がその他のものと違ふ所はといへば、誰しも先づこの知ること又は考へることの力を具して居るといふことに氣附くのである。それに違ひない。「考へる故に人と名く」といふ佛説もある。そこで、そのす

ること、又はなすことが、常に目的である。ある目的を以て多くなされてある。石が山から谷間にころげた所が、それは動いたので、別に目的に働いたのてないから、それを行為とはいへぬ。人間には知る力がある。考へる力がある。そこで、そのすること、なすことが行為と名けられる。行為は何等かの目的的動作である。目的的動作でなければ行為と名けることは出来ぬのである。かう考へて見れば、人間のすること、なすこと即ち行為動作は皆な悉く目的的でなければならぬこととなる。此考は、考として私は確かに正しきものと思ふ。されど、人間は、實際的には毎日々その目的を自覺して目的的に働いて居るかどうか。たとひ、無意識的にさうであるとしてもその目的そのものに支配せられ、或はまた動かされて居ることは存外少ないやうである。春が来たから花見に出かける。花見客は、花を見るのが目的でなければならぬ。ところが、實際はどうであるかといふに、下戸は先づ「花

より團子」である。上戸は花を見ずして花の下で酒を飲んで一向花などは見向きもせぬ。學校に運動の課があるのは、その當初の考は確かに體育の爲めといふにあつたであらう。體育を目的としたる手段の運動は、此頃では何時の間にか、遊戯を目的とするやうになつた。また一方では、試合といふことが各學校の間に起つて、何でも試合に勝ねばならぬといふので、試合が目的となつた。そこで、餘り劇烈にやるから、運動の爲めに反てその身を害するものも少くないといふことすらきいて居る。すべての事か、そんなもので、人間のすることなすことは、多くは目的的に始めらるのであるが、實際には、多く趣味的に動かされ、手段そのもの、爲めに支配せられて居ることが多いのである。手段が目的となつたり、目的が手段となつたりして一定せぬものである。

春先きに、日曜に上野公園とか或はまた日比谷にでも參つて見ると、別に

何の目的もなく多くの人々が楽しさうに遊んで居る。ところが、夕方、砲兵工廠の前でも通ると顔の青白い營養不足のやうな人々が澤山我家に急いで歸るのに逢ふことである。一日、かうせなければならぬとなると、どんな樂しきことでも樂しくないものである。況んや、初めより樂しくないことは、一層苦しいのであらう。此故に、目的的生活は、體の丈夫であり、元氣である間は多少出来るが、その間に何等の趣味をも見出さぬ時は永久に繼續することは出来ぬものである。これは、先年てきいた話であるが、ある私の友達の友達に爪の研究をして居る人がある。唯わき目ふらずに一心一向にそれをやつて居るとのことである。これが研究出来ればどうなるといふさういふ考でなく、唯何となしにおもしろいといふて居るのである。キユーバーの横濱の領事に天保錢を採集して之を研究して居るのもあれば、千社參り札を集めて悦んで居る某外人もある。その他、随分世間には種々なことをして之を樂ん

で居らるる人もあります。これらはこれ、純然たる趣味生活の人と申してよろしい、新聞にも嘗て出て居ましたが、彼の飛行機發明に全身を投じて先年亡くなつた矢津良一といふ人は死ぬが死ぬまで職工を監督して一日も早く之を成功しやうと苦心して居たのである。最う僅かな日數で以て一往出來上るといふ所で遂になくなつた、その時、自分は幾度も生れて來て必ず之を成就すると遺言したさうだ。これは、よい目的生活の代表的人物であると思ふ。然し、彼は頻死の病體を工場に設けられたる床上に横へ乍ら、常にかういふてゐたとのことである。僕には、工場内に響き渡るハンマーの響き程氣持ちのよいものはない。ハンマーの響きは、僕には名人の奏する音樂のやうであると申したさうである。實に矢津氏の生活は目的のみでない。此趣味生活あることによつて初めて最後まで否な何返でも生れ代りて我目的を達するといふことが出來たのである。つまり、眞實なる生活は、單なる目的生活でも

なければ、また單なる趣味生活でもないのである。また、目的といへば、すぐ人は遠い／＼所にもあるやうに思ひ、理想と申すと、誰でもかけ離れたやうに感ずるが、それは間違ひである。必ずしもさうでない。我等のすることとは、何事でも手段そのものうちに早や一步一步目的を見るものである。趣味そのものうちに、既にその理想を認めてこそ、そこに、初めて眞實の生活が出來るものである。

數年前からして、世間では成功といふことをいふ人が漸次多くなつて來た誰も彼も一時成功熱にかされたことである。然し、これは、人間として誰しも普通望む所であつて、人間が目的生活から全然解脱せぬものとすれば、善惡の如何にかゝはらず、世間にやかましくいふといふまいとありうべき事實である。小供に對して、坊は何になるのかといふと、東郷大將になるといふ。別に成功論や努力主義の説法をきかんでも、成功は自然に人の望む所で